

高崎市文化財調査報告書第210集

棟高西石田遺跡

2 0 0 7

高崎市教育委員会

例 言

- ・本書は小学校建設に伴って事前調査された棟高西石田遺跡（高崎市遺跡番号393）の発掘調査報告である。
- ・本遺跡は高崎市棟高町2490他に存在する。
- ・発掘調査及び整理は高崎市教育委員会が行った。
- ・本遺跡の発掘調査は平成18年6月12日から11月30日まで行った。
- ・発掘調査は明石雅夫・黒田晃の2名が行った。
- ・本遺跡の整理作業は平成18年12月1日から平成19年3月31日まで行った。
- ・本書の編集は黒田晃が行った。
- ・遺構の写真撮影は黒田晃が行った。
- ・基準点測量は株式会社中央測量設計に委託した。
- ・水田部分の遺構平面図作成及びデジタルトレースは、株式会社測研に委託した。
- ・出土した遺物及び各種原図は高崎市教育委員会が保管している。

凡 例

- ・遺構番号は、原則として発掘調査時に付したものを使用した。
- ・遺構挿図中に使用した方位記号は、座標北を示している。座標値は国際座標を使用している。
- ・土層注記の色調は、農林省農林水産技術会議事務局（財）日本色彩研究所監修「標準土色帳」を使用した。
- ・遺構実測図の縮尺は原則として平面図を1/160、断面図を1/80・1/40とし、スケールを入れて示した。
- ・本報告書で降下火山灰の略号を使用する場合、下記のものを使用した。
 - ◎ As-C：浅間C軽石
 - ◎ Hr-FA：榛名二ツ岳噴出火山灰
 - ◎ Hr-FP：榛名二ツ岳噴出軽石
 - ◎ As-B：浅間B軽石
- ・本報告書で使用した地図は下記の通りである。
 - ◎ 国土地理院 地形図 「前橋」 1/25,000
 - ◎ 群馬町都市計画図 No12・16 1/2,500

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	

1 遺跡の概要	
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 発掘調査の方法と経過	1
2 遺跡の位置と環境	
2-1 遺跡の位置と周辺の地形	2
2-2 周辺の遺跡	2
3 棟高西石田遺跡の調査	
3-1 調査成果の概要	6
1・2トレンチの調査	6
3・4トレンチの調査	11
5～9トレンチの調査	14
3-2 調査のまとめ	32

挿図目次

第1図 周辺の遺跡 (1/25,000) ・ トレンチ配置図 (1/2,500)	4
第2図 トレンチ配置図・浅間B軽石下水田検出位置図 (1/1,000)	5
第3図 1トレンチ平面図 3・4号土坑 1・2号溝断面図	7
第4図 2トレンチ平面図 1号風倒木 3～5号溝断面図	10
第5図 2トレンチ平面図 2号風倒木 1～2号土坑断面図	11
第6図 3トレンチ平面図 1号井戸 3～6号風倒木断面図	13
第7図 4トレンチ平面図 6号溝 5号土坑断面図	15
第8図 5トレンチ平面図 (東側) 7号土坑 11・13号溝断面図	18
第9図 5トレンチ平面図 (西側) 7～10・12号溝断面図	19
第10図 6トレンチ平面図 (東側) 14～15号溝 6号土坑断面図	20
第11図 6トレンチ平面図 (西側) 7～8号溝断面図	21
第12図 7トレンチ平面図 (東端部) 浅間B軽石下水田・1号掘立柱建物・2号井戸断面図	24
第13図 7トレンチ平面図 16～19号溝・9・11・13・14号土坑断面図	25
第14図 8トレンチ平面図 (西側)	28
第15図 8トレンチ平面図 (東側)	29
第16図 9トレンチ平面図 (東側)	30
第17図 9トレンチ平面図 (西側)	31

1 遺跡の概要

1-1 調査に至る経緯

市立堤ヶ岡小学校では平成18年度現在児童数が900人を超えており、平成19年度以降1,000人を超えることが予想されている。このような児童数の増加に対応するため、既存校舎の増築や新天地への分離校の建設、通学区の変更など、いくつかの対応策を検討する検討委員会が設けられ、対策会議を行った。その結果最終的に分離校の建設が決定した。

建設予定地である棟高地区西部には、平安時代の水田などの遺跡が多数存在するため、開発部局と遺跡保存のための協議が重ねられた。しかし既に計画変更の可能性は残されていないことから、やむを得ず施設建設予定地の発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

1-2 発掘調査の方法と経過

調査対象地は約3,880㎡である。調査以前は水田として活用されており、南に向かって下がる段状の地形を呈していた。遺跡地を一つの調査区として完全に表土を掘削するのは、土置き場を確保するのに困難であるため、高低差を持つ地形の分かれ目ごとに9本のトレンチを設定し、分割して調査を進めた。(第1図参照)

また調査区中央を東西に分割する道路が存在することから、道路西側の調査区(1～4トレンチ)と東側のトレンチ(5～9トレンチ)に大きく二分される。

これらの調査区には世界測地系に即した基準杭を株式会社中央測量設計に委託して打ち、図面作成の基準とした。

調査対象地の表土除去には重機を使用し、遺構確認作業及び覆土除去作業については人力に拠った。

個別遺構の調査では基本的に主軸方向に直行する方向のベルトを残して掘削を行い、土層断面図と遺構平面図を作成した。遺物の出土位置に関しては、光波測距儀を用いて座標値を残した。図面作成においては、簡易遣り方測量と平板測量、光波測距儀によるドットマップの作成などを併用した。

写真は35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルム、及びデジタルカメラを用いて担当者が撮影した。

調査日誌抄

平成18年6月12日	調査用の機材をブレハブに搬入
平成18年6月13日	1トレンチより調査開始
平成18年6月21日	2トレンチ調査開始
平成18年6月28日	3トレンチ調査開始
平成18年6月29日	2・3トレンチの風倒木調査。3トレンチ東にある井戸(1号井戸)調査
平成18年8月4日	4トレンチ調査開始
平成18年8月18日	5トレンチ調査開始
平成18年9月6日	6トレンチ調査開始
平成18年9月22日	5トレンチで浅間B軽石下水田調査
平成18年9月26日	7トレンチ調査開始
平成18年9月28日	1号掘立柱建物および2号井戸の調査開始
平成18年9月29日	7トレンチ浅間B軽石下水田調査
平成18年10月4日	8・9トレンチ調査開始
平成18年11月24日	8・9トレンチの写真撮影
平成18年11月30日	現場発掘作業終了

2 遺跡の位置と環境

2-1 遺跡の位置と周辺の地形

棟高西石田遺跡は高崎市街地の北約6kmの棟高町地内に所在する。

遺跡は榛名山東南麓に広がる相馬ヶ原扇状地の扇端部に位置し、南流する天王川左岸の緩傾斜面に立地している。

天王川は現況で見ると、川幅に比較して段丘比高が大きく感じられるが、これは遺跡付近で昭和50年代に行われた圃場整備によって川幅が半分以下に狭められたためである。従ってこの地域は川によって東西に分けられていたことになり、天王川を挟んだ西の中泉地区と東の棟高地区の遺跡の連続性は途切れている。

天王川の左岸（遺跡東側）に着目すると、川の侵食による段差が認められない平坦な地形が連続しているが、近接する菅谷石塚遺跡⑩⁽¹⁾などから、6世紀前半の榛名山二ツ岳の噴火時に引き起こされた土石流によって、埋没した河川が発見されていることから、かつては小河川がいくつも存在していたことがわかる。

天王川及び埋没河川は南流した後に井野川と合流するが、これらの小河川が小規模な自然堤防や低湿地を数多く形成し、複雑な地形を呈していた。従って遺跡の東側は、現況では平坦であるが、古墳時代の榛名山噴火以前は微高地と低湿地が入り組んだ地形を呈しており、微高地上には集落が、低湿地上には水田が存在していたようである。

2-2 周辺の遺跡

旧石器 遺跡の周辺では、旧石器時代の遺物は検出されていない。旧石器の遺物の少なさは遺跡周辺のみならず高崎市全体にもいえることで、市内における旧石器発見遺跡は数例を数えるのみである。

縄文時代 旧市内では岩野谷丘陵（観音山丘陵）や八幡台地などの台地縁辺部等で遺跡の分布が見られるようになり、中期以降の遺跡数の増加に伴って高崎台地上の烏川・井野川周辺や相馬ヶ原扇状地末端部の舌状台地及び微高地にも遺跡の分布を広げている。遺跡周辺における縄文時代の遺構・遺物の検出例は少ないが、隣接する菅谷町石塚⑩では加曽利E式の土器片が採集されている。また高崎渋川線バイパス工事に伴って調査された小八木志志貝戸遺跡⑫⁽²⁾では、後期称名寺期の敷石住居・掘立柱建物・配石遺構・円形柱列などが検出された。約1km南西の西浦北遺跡⁽³⁾からは中期加曽利E期の柄鏡式住居が、西浦南遺跡⁽⁴⁾からは後期堀之内I・II式の土器を多く含む包含層が検出され、西浦北遺跡の北に近接する権現原Ⅱ遺跡⁽⁵⁾⁽⁶⁾からは加曽利E期の住居が検出された。さらに遺跡の北東3kmにある上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡⁽⁷⁾では堅穴住居跡34軒の他、堅穴住居状遺構9・配石遺構1・炉状遺構2・屋外埋甕18・土坑409基という県内を代表する大集落が検出されている。

弥生時代 前期及び中期前半の資料は少ないが、高崎渋川線バイパス工事に伴う西三社免遺跡⁽⁶⁾⁽⁸⁾では、遺構は伴わないが三角連繫文を施す有文甕の口縁部と網代の痕跡を持つ甕底部の破片が出土している。さらに上野国分僧寺・尼寺中間地域では条痕文系の在地型突帯文壺や磨消縄文を用いた甕または筒形土器が出土し、北原遺跡⁽⁹⁾からは条痕調整・磨消縄文・三角連繫文等を施した土器片が出土した。

中期後半には、市内の平野部に集落が営まれるようになる。浜尻遺跡⁽¹⁰⁾及び浜尻A地点遺跡・B地点遺跡⁽¹¹⁾では、竜見町式土器を伴う環濠集落が検出され、正観寺遺跡群⑦⁽¹¹⁾⁽¹²⁾では炉から連続する敷石を持つ住居が検出された。

後期では小八木志志貝戸遺跡⑫で集落・甕棺墓群・水路が検出され、人面土器が出土した。正観寺遺跡群⑦では環濠集落・方形周溝墓が検出された。他に井野川左岸の井出村東遺跡⁽¹³⁾・西浦北遺跡・西浦南遺跡・熊野堂遺跡⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾・雨壺遺跡⁽¹⁶⁾など、天王川沿いでは諸口遺跡などで多くの住居が検出されている。弥生時代中期後半から後期にかけて集落数が増加したことが伺える。

古墳時代 弥生後期以上に集落遺跡が増加する。また古墳時代に噴火した浅間山・榛名山の火山灰（As-C・

Hr-FA・Hr-FP)で埋没した水田が熊野堂遺跡・大八木屋敷遺跡⁽¹⁷⁾・小八木遺跡⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾・菅谷石塚遺跡⑩などで発見された。

遺跡の周囲は低地が広がっており、古墳時代には水田が経営されていた地域であるが、所々に微高地が存在しており、そこに古墳や集落が造られている。オトウカ山古墳⑨は正観寺古墳群の1基で唯一墳丘の残る直径30m・高さ3.5mの円墳で、円筒埴輪や人物・馬・鳥などの形象埴輪を伴い、主体部は横穴式石室と考えられる。諸口古墳群は諸口遺跡⑧⁽²⁰⁾⁽²¹⁾の調査で3基発掘された。3号墳は円筒埴輪・形象埴輪を伴う横穴式石室で6世紀代の築造と考えられるが、B種横ハケを伴う5世紀代の埴輪棺も検出された。

奈良・平安時代 小八木志志貝戸遺跡⑫で規則的に配置された9棟の掘立建物群が検出され、この地の豪族層の居宅か「上野国交替実録帳」に見られる「八木院」の跡ではないかと考えられている。正観寺遺跡群⑦や小八木遺跡⑬などでは一般的な集落も検出されている。

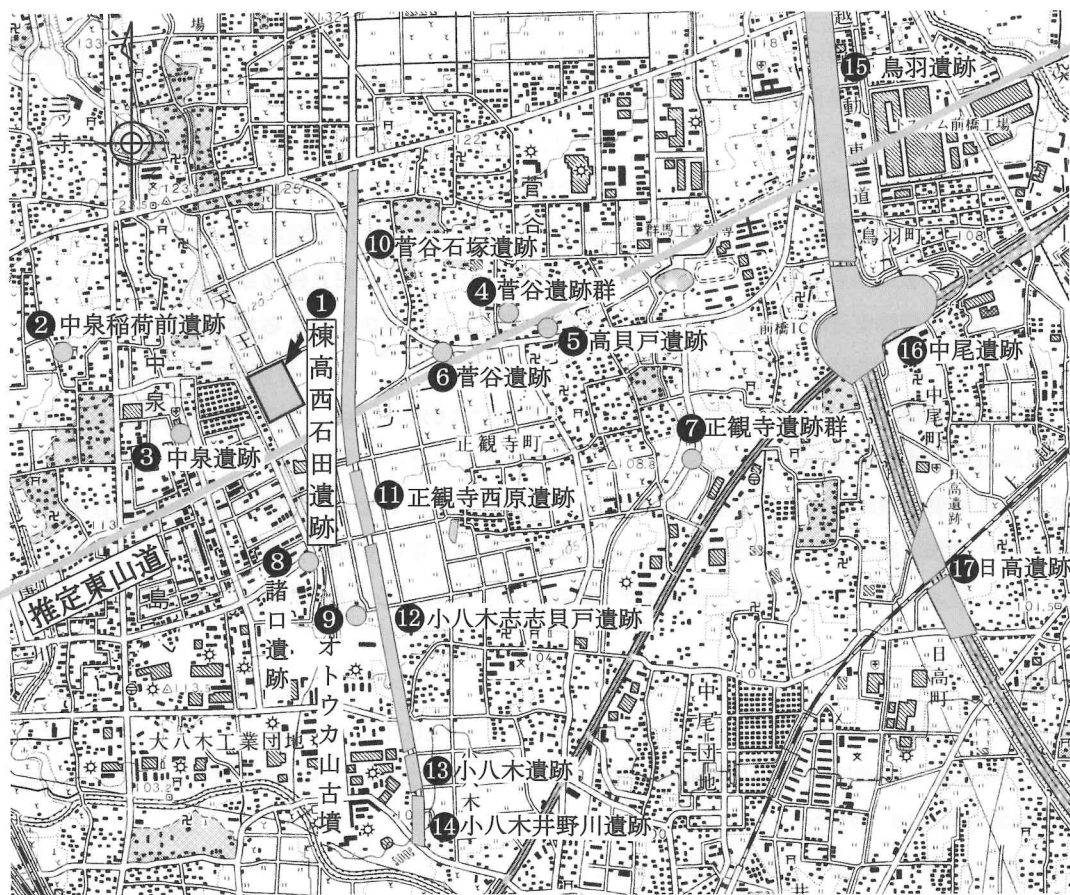
また天仁元(1108)年に浅間山が噴火した際に降下した火山灰(As-B)に埋没した水田が当遺跡の他、菅谷石塚遺跡⑩・正観寺西原遺跡⑪・中泉遺跡③などで検出された。

遺跡の南には東山道駅路が上野国府(前橋市元総社町)に向かってほぼ東西方向に存在したと考えられる。市内では御布呂遺跡・熊野堂遺跡・西浦南遺跡・福島飛地遺跡・菅谷遺跡⑥・高貝戸遺跡⑤などで道路遺構が発見されているが、これらの検出された道がほぼ一直線に続いていることから古代道路の直線性が証明できる。

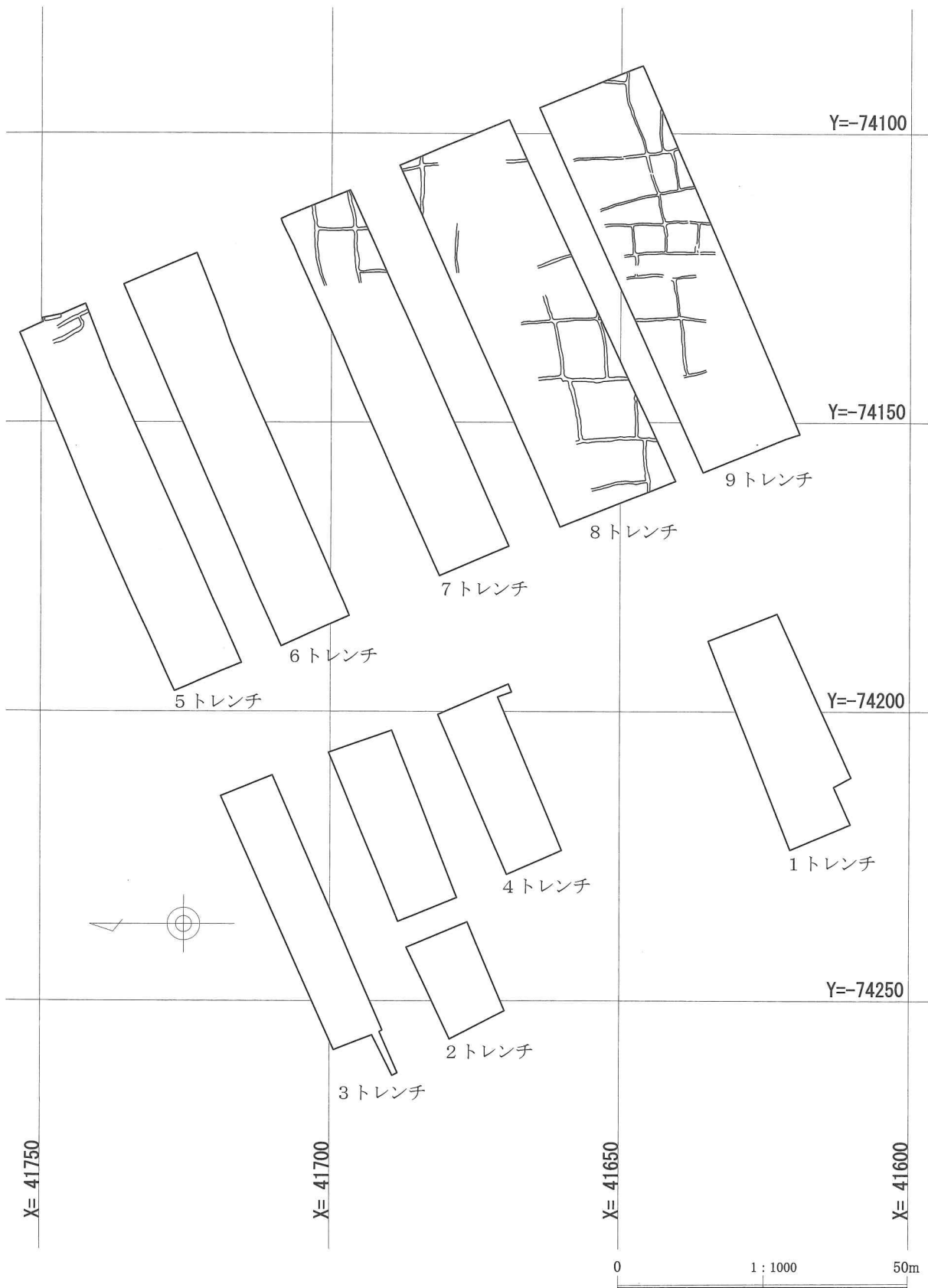
参考文献

- (1)「菅谷石塚遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003
- (2)「小八木志志貝戸遺跡 4 2区縄文時代・4～6区 縄文時代～平安時代編」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
- (3)「西浦北遺跡」 群馬町教育委員会 1989
- (4)「西浦南遺跡」 群馬町教育委員会 1988
- (5)「群馬町誌 通史編上 原始古代 中世・近世」 群馬町誌刊行委員会 2001
- (6)「群馬町誌 資料編1 原始古代 中世」 群馬町誌刊行委員会 1999
- (7)「上野国分僧寺・尼寺中間地域」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (8)「西三社免遺跡」 (主)高崎渋川線(バイパス)道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査 群馬町教育委員会 1990
- (9)「北原遺跡」―関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-1)― 群馬町教育委員会 1986
- (10)「浜尻遺跡」 高崎市教育委員会 1981
- (11)「新編 高崎市史 資料編1 原始古代I」 高崎市史編さん委員会 1999
- (12)「正観寺遺跡群(I)～(IV) 高崎市教育委員会 1979～1982
- (13)「井出村東遺跡」 井出村東遺跡調査会 1983
- (14)「熊野堂遺跡(1)」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (15)「熊野堂遺跡(2)」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (16)「熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (17)「大八木屋敷遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- (18)「小八木遺跡調査報告書(I)」 高崎市教育委員会 1979
- (19)「小八木遺跡(Ⅱ)」 高崎市教育委員会 1980
- (20)「諸口古墳調査概報」 群馬町教育委員会 1984
- (21)「諸口Ⅲ遺跡」 群馬町教育委員会 1985
- (22)「中泉遺跡発掘調査報告」 群馬町教育委員会 1983

2 遺跡の位置と環境



第1図 周辺の遺跡 (1/25,000)・トレンチ配置図 (1/2,500)



第2図 トレンチ配置図・浅間B軽石下水田検出位置図(1/1,000)

3 棟高西石田遺跡の調査

3-1 調査成果の概要

当遺跡では調査区を9区に分割して調査を進め、それぞれの小調査区を1～9トレンチと呼んでいる。

全体的に圃場整備による削平を受けており、遺構の残存状況は概ね不良である。特に西側の調査区である1～4トレンチではその状況が顕著であり、浅間B軽石の堆積を確認することができなかった。また、これら西側のトレンチ西端部では、遺跡の西に流れる天王川の埋め立てられた旧河道となっており、圃場整備に伴って川幅を十数m狭めたことがわかる。

1～4トレンチでは、圃場整備以前の耕作跡や風倒木・井戸等が検出された。特に風倒木及び井戸は、2・3トレンチを中心とした調査区北部に偏っており、南側の1・4トレンチでは確認できなかった。風倒木は直径が3～5m前後と大型で、断面に見られる旧地層と現在の地層を比較してみると、少なくとも風倒木が立っていた時期には現在よりも高いレベルに地表面があったことがわかる。

調査区東側の5～9トレンチでは浅間B軽石の堆積が確認され、5・7～9トレンチで浅間B軽石下水田の畦が検出された。

浅間B軽石下水田の畦は、調査区北部よりも南部の残存状態が良好で、特に8・9トレンチではほぼ全域から検出された。畦の方位はほぼ座標の東西方向・南北方向に一致している。

7トレンチでは中世のものと考えられる2間×2間の掘立柱建物1棟と隣接する井戸が検出された。

遺跡に隣接する菅谷石塚遺跡・小八木志志貝戸遺跡等では中世の土抗墓・火葬墓・掘立柱建物・「あづま道」と推定される中世幹線道などが発見されており、遺跡周辺地が中世に屋敷地及び墓地として活用されていたことが判明している。

その他、東側の調査区（5～9トレンチ）からは、圃場整備以前の水田耕作で活用されたと思われる多くの溝が検出された。

1・2トレンチの調査

1トレンチ（第3図）

1トレンチは調査区南西端に存在する南北13.4m・東西39.3mのトレンチである。

調査区南東側では、表土である耕作土の下に浅間C軽石が混入した黒色土（以後「C黒」と省略する）が残存しているが、他の部分は削平されており、浅間B軽石も存在しない。特にトレンチ西端から約13mの間は、天王川を埋め立てたシルト質の土があり、遺構は無い。

トレンチ東端には植物の根が張っていたと推定される小穴群が存在する。

トレンチ中央部南端の1号溝と2号溝は、並行して存在している。検出当初はもう少し長く続くものと考えていたので「溝」の名称をつけたが、実際は長軸4m程の細長い土抗である。

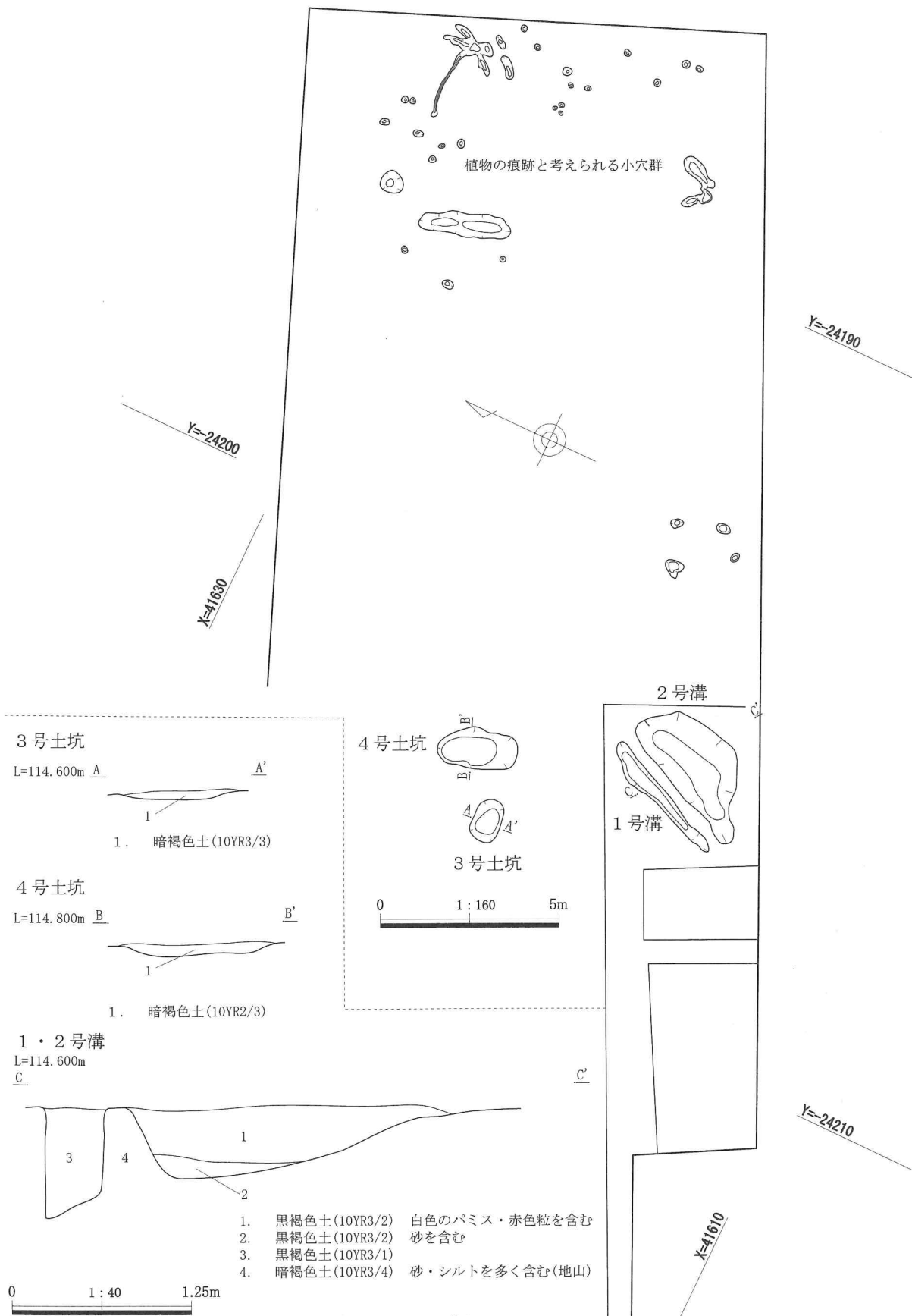
1・2号溝の北には浅い土抗である3・4号土抗が存在している。

1号溝

幅80cm・長さ392cmの溝で、深さは浅いところで58cm・深いところで75cmを計測する。並行する2号溝とは立面構造が大きく異なり、地表から垂直に、直線的に掘り込まれている。底の部分に関しては水平ではなく北へ傾いている。覆土は黒褐色土で分層はできない。

2号溝

幅186cm・長さ420cmで、長さを見ると1号溝とほぼ一致しているが、掘り方は全く異なっており、特に南東方向に向けて緩やかに立ち上がる。覆土は黒褐色土で下層は砂を含んでいる。平面的な位置関係から見て1号



第3図 1トレンチ平面図 3・4号土坑 1・2号溝断面図

3 棟高西石田遺跡の調査

溝とセットになっていたと推定されるが、機能は不明である。

3号土抗

80cm×126cm・深さは約7cmの土抗で、暗褐色土を覆土とする。

4号土抗

116cm×222cmの南北に長い土抗で、深さは11cmである。

2トレンチ（第4・5図）

2トレンチは1トレンチ・4トレンチの北に存在するトレンチである。

進入路の関係で東西2トレンチに分割して調査を開始した。東側のトレンチは南北11.37m・東西30.01mで西側のトレンチは南北11.15m・東西17.14mである。

2トレンチ東側のトレンチ（第4図）

東側のトレンチを精査していくと、1トレンチと同様に地層の上部が削平されており、浅間B軽石は残存していなかった。

浅間C軽石が混入した黒色土（C黒）がほぼ調査区全体に広がっており、このC黒を掘削する形で遺構が存在する。東側のトレンチからは風倒木（1号風倒木）及び調査区をほぼ南北に横断する溝（5号溝）が検出され、更にトレンチの西端部からは灰色のシルト質の土を覆土とする2条の溝（3・4号溝）と、耕作痕と推定される小土抗群が検出された。この小土抗群は、西側のトレンチにも続いている。

3号溝

幅23cm・深さ9cmの溝で、トレンチ中央部やや西の南壁から北西方向に傾いて存在している。覆土を見ると、褐灰色シルトを含む黒褐色土で、4号溝の覆土とやや異なる。

平面形状を見ると、4号溝と同様に調査区の南北端から外に伸びているが、南の4トレンチ及び北の3トレンチから溝の続きを確認できなかった。

溝底の立ち上がりは緩やかである。

4号溝

幅42cm・深さ10cmの溝で、トレンチ中央部やや西の南壁から北西方向に傾いて存在している。この傾きは、隣接する3号溝とやや異なる。

連続的な溝としては存在しておらず、所々立ち上がって再び連続するという形状を呈する。覆土は褐灰色のシルトを含む暗褐色土で、連続しない部分で取ったセクションD-D'とE-E'が全く同じ覆土であることから、同時に埋没したものと推定され、底の深さの異なる溝の上端が削平され、不連続な溝として残存している可能性も考える必要がある。

溝底の立ち上がりは緩やかである。

5号溝

東側のトレンチ東端に存在し、調査区南端から北端に向けてほぼ南北方向に掘られている。幅は56cm・深さは7～14cmを計測する。

調査区の南北端から外側へ伸びており、北の3トレンチでは続きは検出できなかった。南の4トレンチ東端に存在する6号溝に続くように見られるが、覆土・溝の深さ・掘り方等に異なる点が多く、違う溝であると考

えた方が良さそうである。

覆土は黒褐色土で砂を多く含んでおり、水が流れていた可能性が高い。溝底の立ち上がりは、削られているため顕著ではないが、直立するような形状を呈している。

1 号風倒木

東側のトレンチ南東部分で5号溝の西に存在する風倒木である。平面形状は320cm×262cmのほぼ円形で、深さは120cmを計測する。

断面の観察から木が立っていた時期にはA'側が上でA側が下であったと考えられる。すなわち立木は西あるいは南西に向かって倒れている。

2 トレンチ西側のトレンチ (第5図)

西側のトレンチの西端は、1トレンチと同様天王川の埋め立て土が広く検出されるため遺構が存在していない。また、東側のトレンチ同様に上面が削平を受けているため、浅間B軽石は残存しておらず、遺構検出面は浅間C軽石が混入した黒色土(C黒)である。

ここからは、調査区東南隅から北西方向に向けて連続した小土抗が検出された。覆土であるシルト質の土を除去すると、小土抗が連続・並行して掘られている様子が確認できた。形状からみて、小土抗は鍬あるいは鋤で耕した耕作痕であると考えられる。この耕作痕は東側のトレンチにも続いているが、東側では帯状・並行した様子は観察できなかった。

その他、土抗が2基と風倒木が1基検出された。

1 号土抗

西側のトレンチほぼ中央に存在する土抗である。平面形状は短軸54cm×長軸230cmの隅丸方形で、深さは17cmあり、床面からやや直立した立ち上がりを呈している。

覆土を見るとシルト混じりの暗褐色土で、耕作痕とほぼ一致しており、主軸方位も耕作痕の進行方向に一致することから、耕作に伴う土抗であると推定される。

遺物は検出されなかった。

2 号土抗

西側のトレンチ中央やや北西よりに存在する土抗である。2基の土抗が接合した形状を示し、短軸は55cm・長軸は140cmを計測する。深さは12cmで、床面からやや垂直気味の立ち上がりを示している。

遺物は検出されなかった。

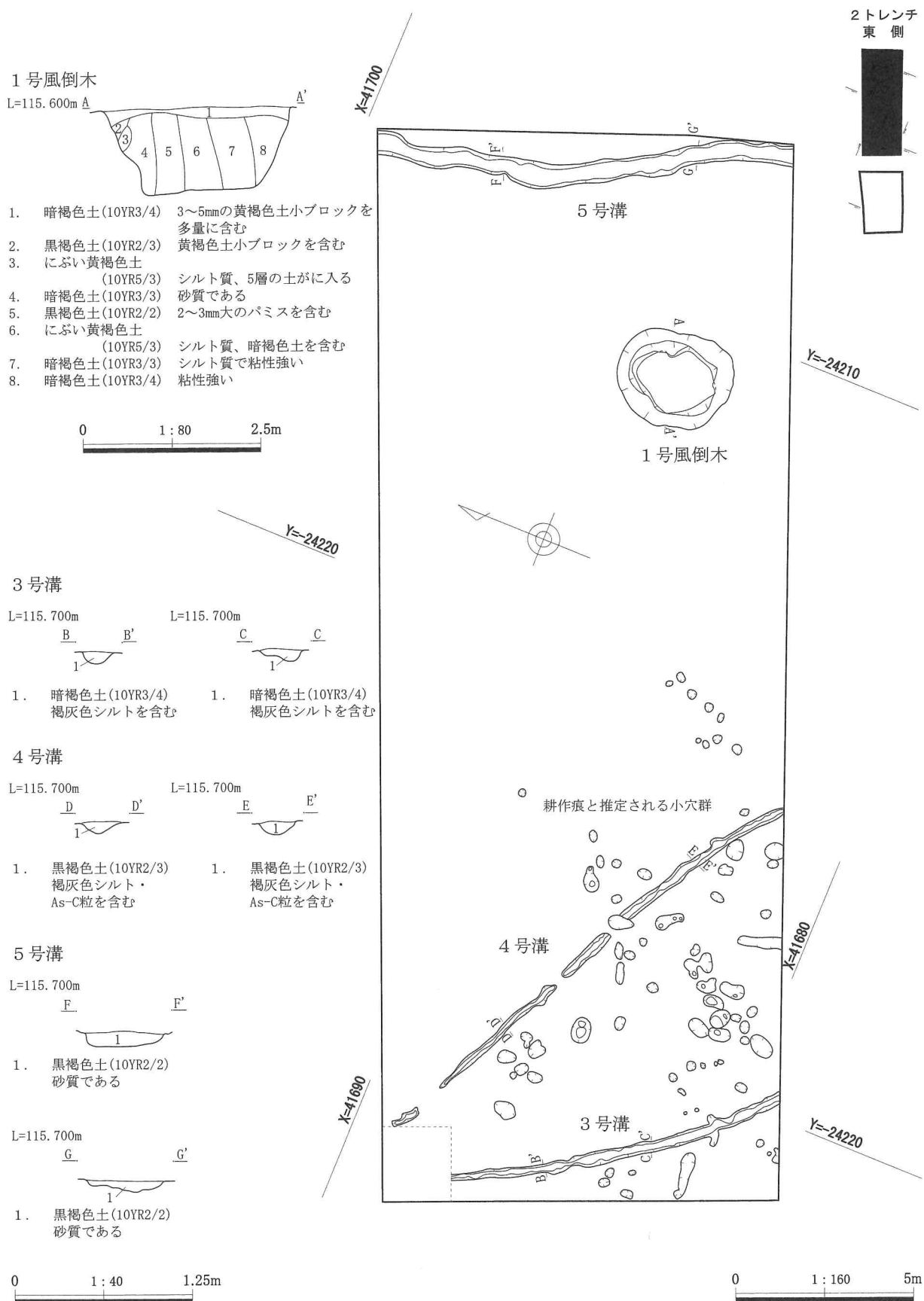
2 号風倒木

西側のトレンチ中央やや北寄りに存在する風倒木である。平面形状は248cm×256cmのほぼ円形で、深さは87cmを計測する。1号風倒木と比較すると若干小型になる。

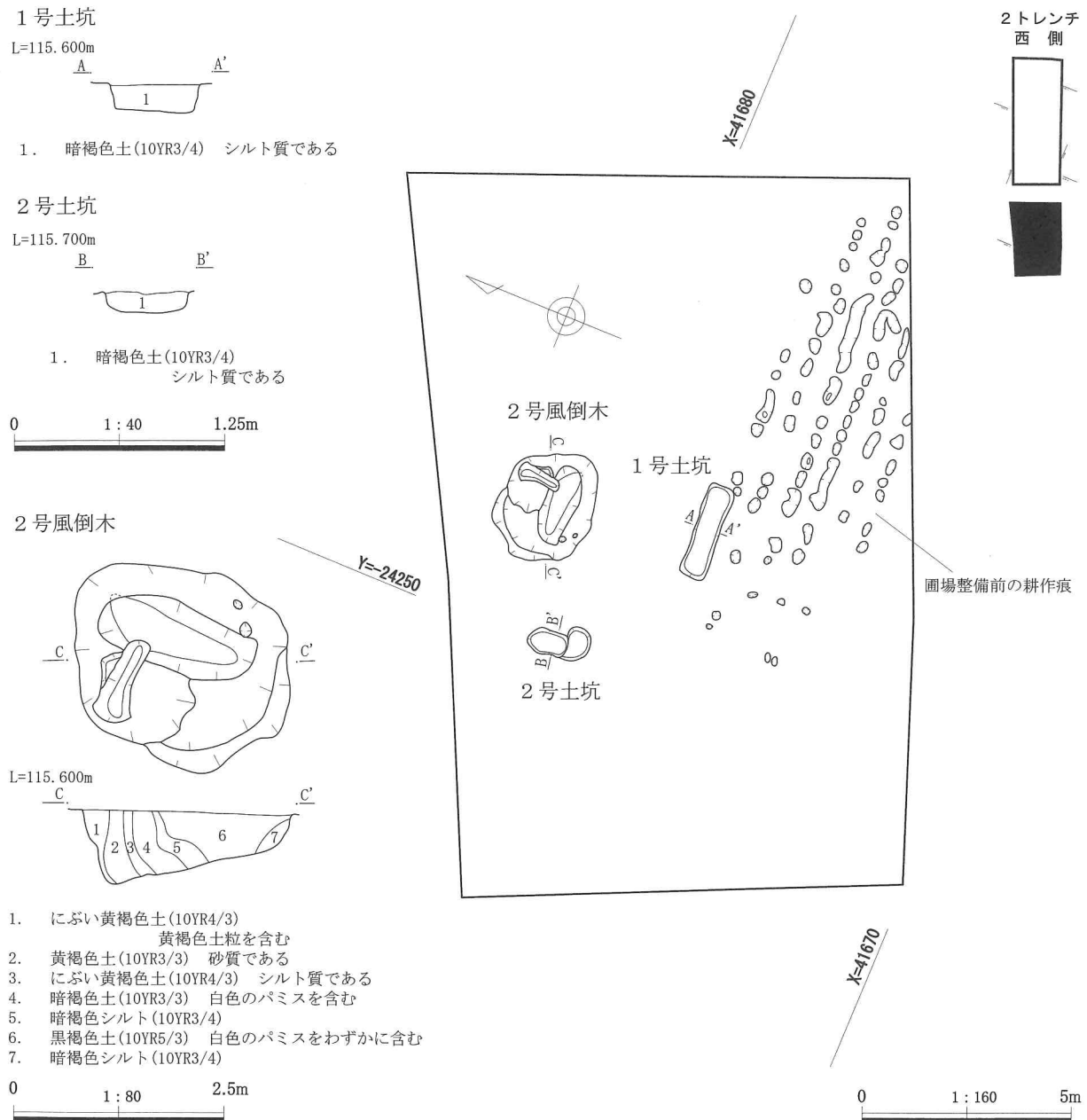
断面の観察から木が立っていた時期にはC'側が上でC側が下であったと考えられる。すなわち立木は西あるいは南西に向かって倒れている。木の倒れた方向から見ても、1号風倒木との共通性が認められる。

覆土は6層である黒褐色土が60cmから150cmとかなり厚く、当時の地表面がC黒と考えられる4層から計測して、水田として活用していた現在の地表面よりも数十cmから1m近く高かったことがわかる。

3 棟高西石田遺跡の調査



第4図 2トレンチ平面図 1号風倒木 3~5号溝断面図



第5図 2トレンチ平面図 2号風倒木 1～2号土坑断面図

3・4トレンチの調査

3トレンチ (第6図)

3トレンチは遺跡中央を南北に走る道路の西側に存在する1～4トレンチの中で、最も北に存在する調査区であり、東西は55.49m・南北は8.74mである。

1・2トレンチと同様に、3トレンチの西端には約14mにわたって天王川を埋め立てた際の埋土が覆っており、遺構が存在しない。

また浅間B軽石は残存しておらず、遺構確認面はC黒かその上の赤みがかった褐色土である。

風倒木は調査区の全域から4基検出された。トレンチの中央及び東寄りには直径が4m以上ある大型の3号・6号風倒木があり、西側には直径3m弱の4号・5号風倒木が南北に並んで存在している。

風倒木の大きさ(径)の違いがそのまま木の大きさを示しているとすれば、大型の木が調査区の東側に存在し、比較的小型の木が西側に存在していたことが予想できる。これは2トレンチの1号風倒木よりも2号風倒木の方がやや小型であったこととも矛盾しない。

3 棟高西石田遺跡の調査

木の倒れた方向を土層断面から見てみると、3号・4号風倒木が南東方向へ向かって倒れているのに対し、5号・6号風倒木は北西方向に向かって倒れていることが確認され、倒木の要因が一つではないことが推察される。

また風倒木の土層の断面に見える木の立っていた時期の層（当時の最上層と考えられる層）は、現在残存している同一の層よりもかなり厚みがあり、木が立っていた当時は現在よりも高い位置に地表があったことがわかる。

当トレンチの東端部分からは1号井戸が検出された。井戸に伴って掘立柱建物が存在するのではないかと周辺を精査してピットの有無を確認したが、検出できなかった。

7トレンチで検出された1号掘立柱建物・2号井戸と同様に、1号井戸からは遺物が全く出土していないので正確な時期を導き出すことが困難であるが、東に隣接する菅谷石塚遺跡から中世の掘立柱建物・井戸・溜池が、また小八木志志貝戸遺跡からは中世の幹線道「あづま道」が検出されていることから、当遺跡の井戸及び掘立柱建物も中世の所産であると考えられる。

西側のトレンチからは浅間B軽石が検出されていないので、土地利用について正確には判断しかねるが、東側のトレンチでB軽石下水田が検出されていることから、少なくとも平安時代は水田として活用されていたことがわかる。

また風倒木の土層断面から、木が立っていた時期には現在よりもかなり地表面が高かったことが判明しているが、少なくとも平安時代・近現代には大木が林立するような状況ではなかったと考えられる。従って、中世のある時期に天王川沿いでは地表が現在より高く、木が林立しており、館や井戸が存在していたのではないだろうか。

1号井戸

トレンチ東端部から検出された井戸である。平面形態は194cm×190cmのほぼ円形で、検出面より下約120cmから一段細くなる。深さは265cmで床面は平坦で、現在も湧水が認められる。遺物は出土しておらず、周囲に掘立柱建物も存在しないが、中世の建物に伴う井戸であると推定される。

3号風倒木

トレンチのほぼ中央部で検出された445cm×445cmの円形の風倒木であり、深さは170cmを計測する。

土層断面を見ると、地山の11・1～4層が、B側からB'側に向かって並んでおり、11層の黒褐色土が最上層になると考えられることから、B側すなわち北西側に向かって木が倒れたことがわかる。

11層の厚みを見ると、風倒木の断面では約90cm残存しているのがわかるが、現況で地層として残っているのはB側のみで、厚さは30cm足らずである。またB'側に11層は存在していない。

11層の厚みだけ見ても現在の地表より60cm以上高い位置に最上層が乗っていたことがわかる。現況では水田地帯となっているので遺跡周辺は低地であると考えがちであるが、風倒木が立っていた時期には現況より数十cm地表が高く、尚且つかなり太い木が林立していたことが推定される。

遺物は検出されなかった。

4号風倒木

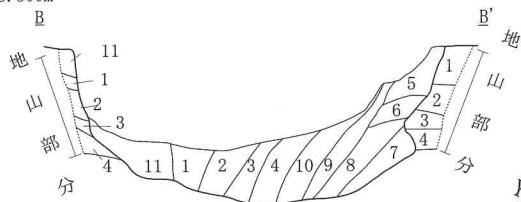
トレンチ南西部分で検出された290cm×250cmのやや崩れた円形の風倒木である。深さは98cmを計測する。

断面図を見ると各層がほぼ垂直に分割されていることから、ほぼ真横に倒れたものと考えられる。4層の暗褐色土が最上層であることから、C'の方向である南東方向に向かって倒れたことがわかる。風倒木の規模から考えて、3号・6号風倒木と比較して細い木であったと思われる。

遺物は検出されなかった。

3号風倒木

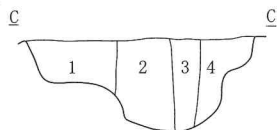
L=115.800m



1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)シルト質である
2. 黒褐色土(10YR2/2)
3. 暗褐色土(10YR3/3)シルト質
4. 暗褐色土(10YR3/3)砂を主体とする
5. シルトと暗褐色土の混土
6. にぶい黄褐色砂(10YR4/3)シルトを大量に含む
7. にぶい黄褐色シルト(10YR6/4)砂を多く含む
8. 暗褐色砂(10YR3/3)シルトを含む
9. 灰黄褐色砂(10YR4/2)
10. にぶい黄褐色シルト(10YR7/3)
11. 黒褐色土(10YR2/2)

4号風倒木

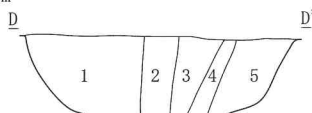
L=115.600m



1. 褐色シルト(10YR4/4)一部2層を含む
2. 黒褐色土(10YR2/2)
3. にぶい黄褐色シルト(10YR6/4)
4. 暗褐色土(10YR3/3)

5号風倒木

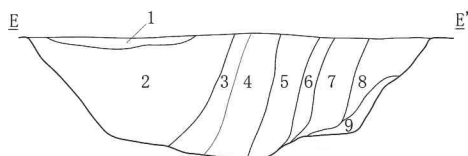
L=115.600m



1. 暗褐色土(10YR3/3)
2. にぶい黄褐色シルト(10YR6/4)シルト質
3. 黒褐色土(10YR2/2)
4. 褐色シルト(10YR4/4)一部2層を含む
5. 暗褐色土(10YR3/3)砂を多く含む

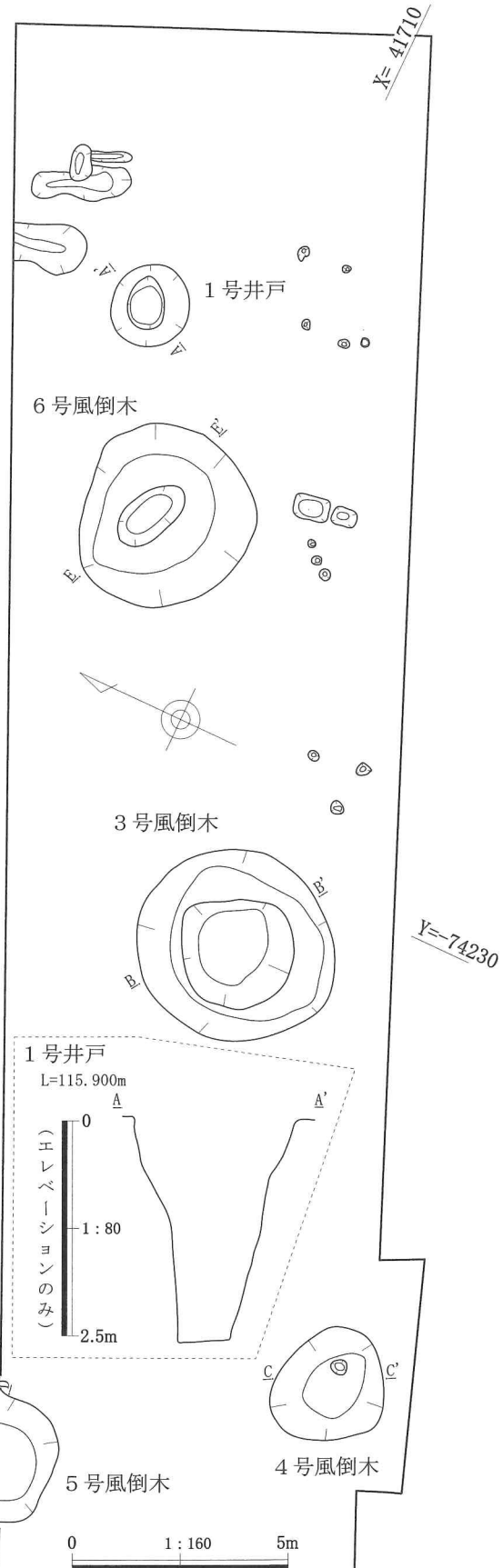
6号風倒木

L=115.700m



1. 黒褐色土(10YR2/3)As-C粒を多く含む
2. 黒褐色土(10YR2/3)
3. 暗褐色土(10YR3/4)シルト質
4. 灰黄褐色シルト(10YR3/4)砂質である
5. 黒褐色土(10YR2/2)パミス・赤色粒を含む
6. 黒褐色土(10YR2/3)シルト・砂を含む
7. 暗褐色土(10YR3/3)砂を多く含む
8. にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)砂を多く含む
9. 黒土(10YR2/1)

0 1:80 2.5m



第6図 3トレンチ平面図 1号井戸 3～6号風倒木断面図

3 棟高西石田遺跡の調査

5号風倒木

トレンチの北西部分で検出された径290cmの風倒木である。4号風倒木と北西に並ぶ位置に存在し、深さは96cmである。

断面図を見ると1層の暗褐色土が最上層で、Dの方向である西方向へ向かって木が倒れたことがわかる。従って、4号風倒木とは規模や位置は一致しているが、倒れた方向がやや異なっていることが判明している。

4 トレンチ（第7図）

4 トレンチは道路の西側にある1～4 トレンチのほぼ中央に位置し、2 トレンチの南に存在する南北10.56m・東西29.68mのトレンチである。

調査区の大部分は削平されており、浅間B軽石は残存しない。遺構の検出面はC黒かその上の赤みがかった褐色土であるが、ここに掘り込まれた遺構はほとんど存在せず、東端に調査区を南北に横切る6号溝と、西端に5号土抗が存在するのみである。

6号溝

調査区東端をほぼ南北方向に横切る溝である。溝幅は70cm・長さは調査区の南北間に10.86m存在している。断面を見ると、溝底からほぼ直立した立ち上がりで、覆土に多くの砂を含んでいる。深さは約28cmである。

2 トレンチ東端に存在した5号溝と位置関係を比較すると、連続した遺構となりそうに見えるが、溝の平面形態が6号溝は直線的であるのに対し、5号溝では緩やかにくねっていること、5号溝の方が浅く覆土も異なることから、別の溝として扱っている。

遺物は検出されなかった。

5号土抗

調査区西端部中央に存在する土抗で、75cm×68cmのほぼ円形の平面形態を呈し、深さは20cmを計測する。

断面は床面からほぼ直立した立ち上がりで、砂質の覆土を持つ。

遺物は検出されなかった。

5～9 トレンチの調査

遺跡の中央を南北に分ける道路より東の区域である5～9 トレンチには、西側の1～4 トレンチと比べて、遺構の残存状況や層の有り方に違いが認められる。

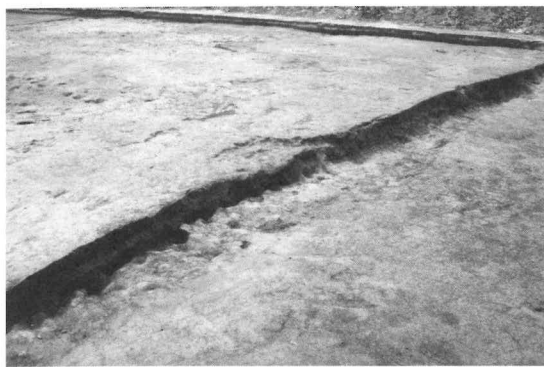
第一に浅間B軽石の存在を上げることができる。5～9 トレンチではトレンチの東・南部を中心に、浅間B軽石の堆積が認められた。

北端の5 トレンチでは東端部にのみ、7 トレンチでは調査区の東部1/4程度に、8・9 トレンチではほぼ全域で浅間B軽石が確認され、それぞれの軽石下から水田の畦が検出された。（第2図を参照）

畦の方向は、ほぼ東西・南北方向で、現在の水田とは異なっている。明らかに浅間B軽石下水田に伴う溝などの水田付随施設は検出されなかった。

第二に圃場整備以前のものと考えられる溝が多数検出された。溝の進行方向は、圃場整備後の水田方位とは異なり、むしろ浅間B軽石下水田の畦の方向に近いが、覆土にB軽石を含んでおらず、遺物も近世末から近代にかけての陶磁器の小片が多いことから、近現代の水田に伴う用水路であると推定される。

また、7 トレンチからは中世のものと考えられる2間×2間の掘立柱建物（1号掘立柱建物）とこれに付随する井戸（2号井戸）が検出された。隣接する菅谷石塚遺跡で検出された中世掘立柱建物と関連付けて考慮する必要があるようである。



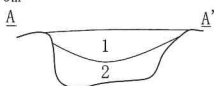
6号溝 南東から撮影



調査中の4トレンチ 西から撮影

6号溝

L=115.500m



1. 黒褐色土(10YR2/3)砂を極めて多く含む
2. 暗褐色土(10YR3/3)砂を多く含む

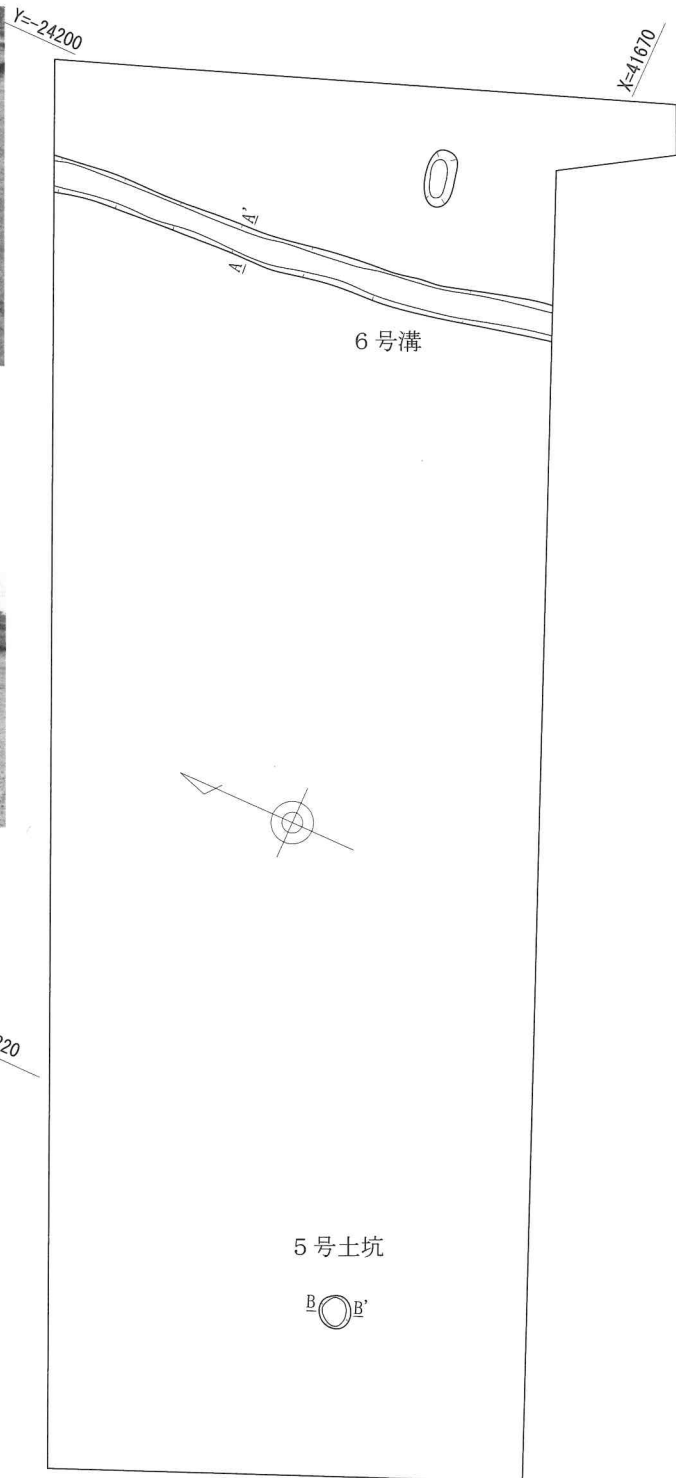
5号土坑

L=115.500m



1. 暗褐色土(10YR3/3)砂質である

0 1 : 40 1.25m



0 1 : 160 5m

第7図 4トレンチ平面図 6号溝 5号土坑断面図

3 棟高西石田遺跡の調査

5 トレンチ (第8・9図)

5 トレンチは遺跡中央を南北に走る道路の東側に存在する5～9 トレンチの中で、最も北に存在する調査区であり、東西は67.63m・南北は12.64mである。

トレンチの東南端に浅間B軽石の残存が認められ、軽石下から畦が確認された。

残存状態は悪く、南北方向の畦が2本検出されたのみで水田区画は不明である。畦の高さは1cm前後で、トレンチ南端から北に伸びるが、途中で削平されそこから北は存在しない。

畦の東に接して掘られている7号土抗は覆土に浅間B軽石を多く含んでおり、水田に近い時期に掘られた可能性がある。

畦より西は削平が進んでおり浅間B軽石は存在しない。南北に伸びる13号溝より西には圃場整備前の水田で利用していたと推定される溝(水路)が多数検出されている。

溝の掘削方向から見ると、ほぼ南北方向に掘られている7・8号溝、北東方向に掘られている12号溝とこれに直交する10・11号溝、現在の水田の方位と同一の9・13号溝に分けられる。

7号土抗

トレンチ東端に存在する長さ295cmの土抗で、東壁は調査区外にあり幅は不明である。調査区内で確認された幅は73cmを計測する。掘り方は床下からやや直線的に立ち上がり、深さは20cmで、覆土には浅間B軽石を大量に含む層と軽石主体の層に分層される。

覆土におけるB軽石の存在から考慮して、近世・近代に掘られた土抗であるとは考えにくく、浅間B軽石下水田とあまり変わらない時期の遺構であると推定される。

7号溝

トレンチの西側で検出された南北方向に伸びる溝で幅は340cmあり、長さはトレンチ内では13.25m確認された。当溝の東3mに存在する8号溝とほぼ同じ方向で掘られており、並行関係にある。

覆土を見ると同一に埋まった様子が確認できるが、構造的には複数の溝が一つになったような状況で、西寄りが深く東寄りが浅い。溝の深さは浅い東側部分で16cm、深い西側部分で52cmを計測する。

覆土は砂を多く含む暗褐色土である。

8号溝

トレンチ西側で検出された南北方向に伸びる溝で幅は145cmあり、長さはトレンチ内では13.26m確認されている。7号溝とは並行関係にある。

比較的幅の広い溝で、溝底から緩やかに立ち上がっている。深さは20cmを計測し、覆土は砂を多く含む黒褐色土である。

トレンチの中央付近で土抗状の掘り込みが確認された。12号溝と重複関係にあるが、当溝の方が新しい。

覆土中から近世陶磁器の小片が出土している。

9号溝

トレンチ中央西寄りで8号溝の東に存在する溝で、掘削方向は南壁より北北西方向へ掘削されており、圃場整備後の水田方位にはほぼ一致している。溝幅は104cmあり、長さはトレンチ内では12.80m、深さは12cmを計測し、床面から広がりながら直線的に立ち上がる。

溝幅はほぼ同一で、平面形態は直線的である。覆土には7・8号溝と異なり砂を含んでいない黒褐色土で、近代の陶磁器類が僅かに出土している。12号溝と重複関係にあるが、当溝の方が新しい。

10号溝

トレンチ中央付近で検出された、南壁から北西方向に伸びる溝である。幅は55cm、長さはトレンチ内で13.28mを計測する。深さは約22cmで、床面から丸く立ち上がっており、立ち上がりの形状は12号溝とよく似ている。南壁付近で2条の溝に分れるような形状を呈している。

溝の掘削方向は、東に隣接する11号溝とほぼ一致している。12号溝とは直交するが、新旧関係は不明である。また8・9号溝と重複関係にあるが、当溝の方が古い。

11号溝

トレンチ中央北寄りで検出された、南壁から北西方向に伸びる溝である。トレンチ中央付近から南半は、何条かの浅い溝が入り組んだような形状を呈している。

溝幅は北の部分で115cm、南の部分で483cmを計測し、深さは浅い部分で18cm、深い部分で62cmある。

12号溝と重複しているが、前後関係ははっきりしなかった。この重複する12号溝とは直交しており、11号溝の東側に12号溝が続いていないことから、11・12号溝は同一の溝であった可能性が高い。

また、西に隣接する10号溝と溝の傾きがほぼ同一である。この10・11号溝の関係は、西で検出された7・8号溝の関係と良く似ており、溝の機能を考える上で考慮する必要があるであろう。

覆土は砂粒を多く含む黒褐色土である。

12号溝

トレンチ西の南壁から北東方向に伸び、11号溝に連結する溝である。11号溝とは直交する位置関係にあり、11号溝の西側には12号溝は続いていない。

溝幅は55cm、長さは南壁から11号溝まで21mを計測する。断面は床面から円形の立ち上がりで、深さは16cmである。

覆土は砂粒を含んだ黒褐色土で11号溝に近い。

13号溝

トレンチ東側に南北方向に伸びる幅は124cm、長さはトレンチ内で12.3mを計測する溝である。

南壁から北北西方向に向かって伸びており、圃場整備後の水田の方位とほぼ一致する。床面からほぼ直立するような形で浅く立ち上がっており、覆土は砂を僅かに含む黒褐色土である。

西に存在する9号溝と比較して平面形状・断面形状・掘削方位など共通性が多く、同一の機能を持つ溝であると推定される。

6 トレンチ (第10・11図)

6 トレンチは5 トレンチの南にあるトレンチで、東西は68.07m・南北は13.10mである。

北の5 トレンチ東端で検出された浅間B軽石は、6 トレンチでは完全に削平されてしまっており、残存していない。従って浅間B軽石下水田はこのトレンチでは確認できなかった。また5 トレンチの7号溝のように、浅間B軽石によって埋没した土抗及び溝は検出されなかった。

また5 トレンチで検出された7号溝及び8号溝の南の続きは6 トレンチにおいても確認できた。ただし8号溝の断面形態及び床面の形態が、5 トレンチのそれと若干異なっているので注意が必要である。

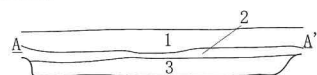
9号溝及び10～12号溝は6 トレンチへは続いていない。新たに14号溝がトレンチの南北を通して掘られ、その東に南壁から来た壁の手前で東に折れる15号溝が存在する。

14・15号溝は7・8号溝と掘削方位がほぼ同一である。

3 棟高西石田遺跡の調査

トレンチ南端の11号溝平面図は
第★図に再度掲載いたします。

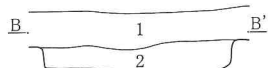
7号土坑
L=116.500m



1. 黒褐色土(10YR3/2)現耕作土
2. 暗褐色土(10YR3/3)As-B粒を多く含む
3. 黒褐色土(10YR2/2)As-B粒を主体とし、暗褐色土を多く含む

0 1:80 2.5m

13号溝
L=116.000m



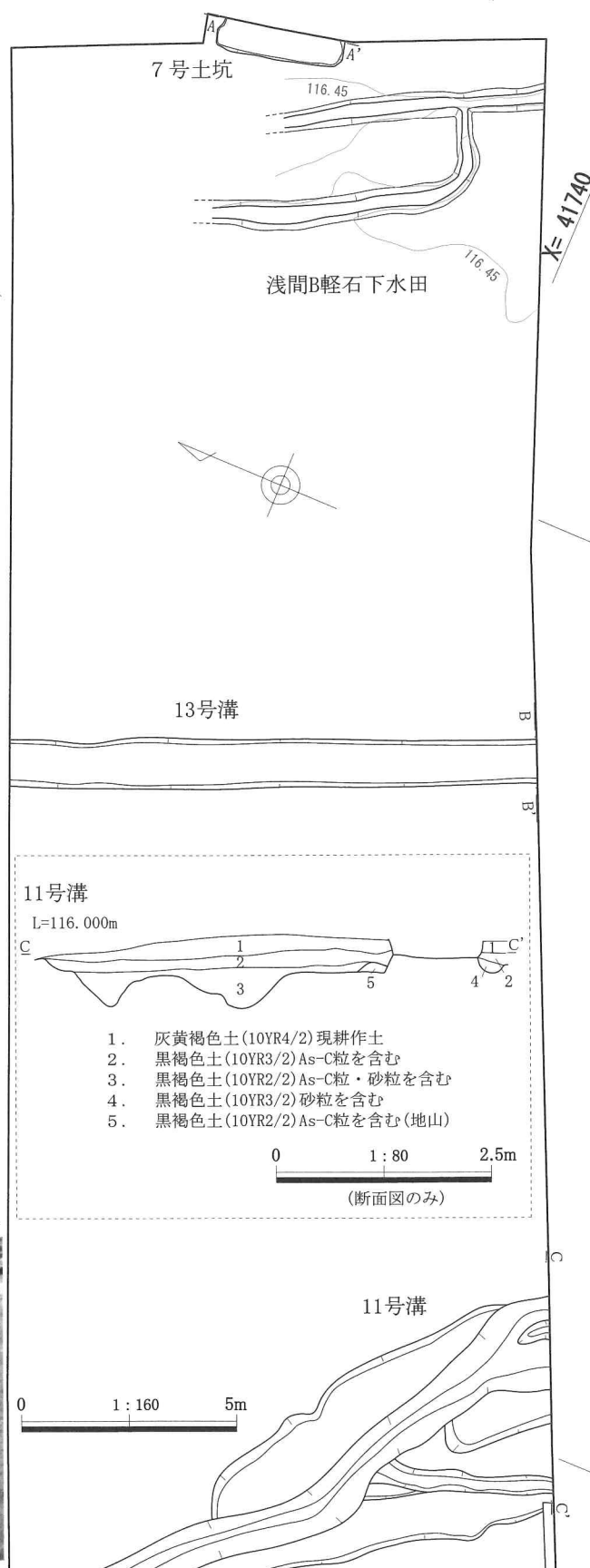
1. 灰黄褐色土(10YR4/2)現耕作土
2. 黒褐色土(10YR3/2)砂をわずかに含む

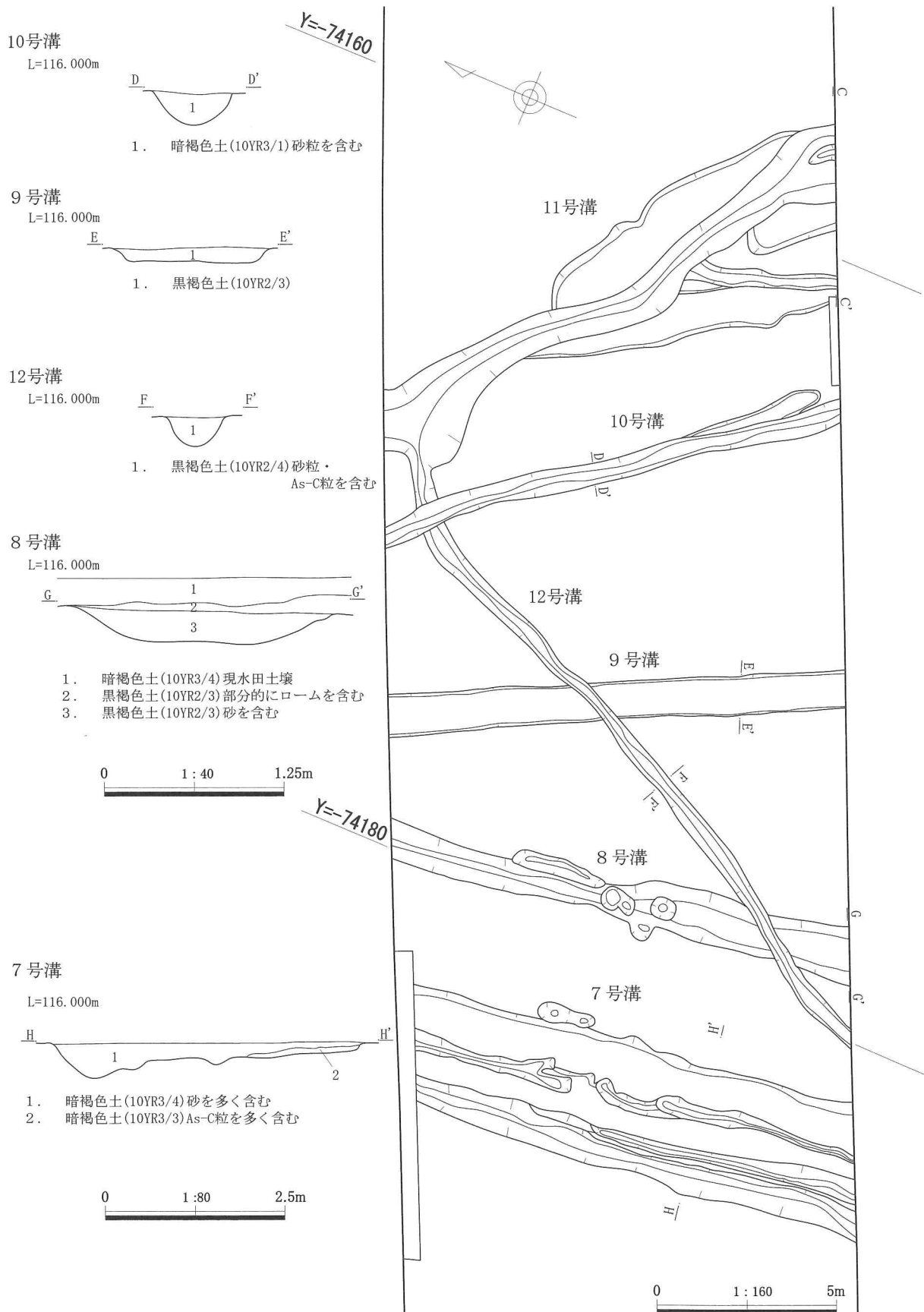
0 1:40 1.25m

11号溝 南から撮影



第8図 5トレンチ平面図(東側) 7号土坑 11・13号溝断面図



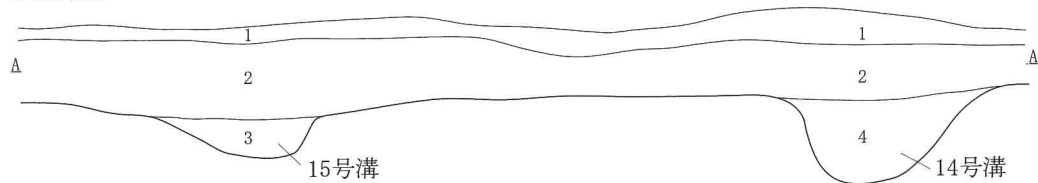


第9図 5トレンチ平面図(西側) 7~10・12号溝断面図

3 棟高西石田遺跡の調査

14・15号溝

L=116.400m



1. 暗褐色土(10YR3/3)現耕作土
2. 黒褐色土(10YR3/2)砂粒・As-C粒を含む
現耕作土
3. 黒褐色土(10YR2/2)砂粒を大量に含む
15号溝の覆土
4. 黒褐色土(10YR2/2)砂粒を極めて多く含む
14号溝の覆土

15号溝

L=116.400m

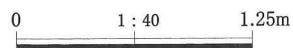


6号土坑

L=115.800m



※6号土坑は調査区北端で溝状に伸びているので、溝となる可能性も考えられるが、調査時には土坑として認識していた。
床面には細かい起伏が見られる。



Y=-74140

B B'

15号溝

14号溝

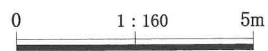
X= 41720

Y=-74160

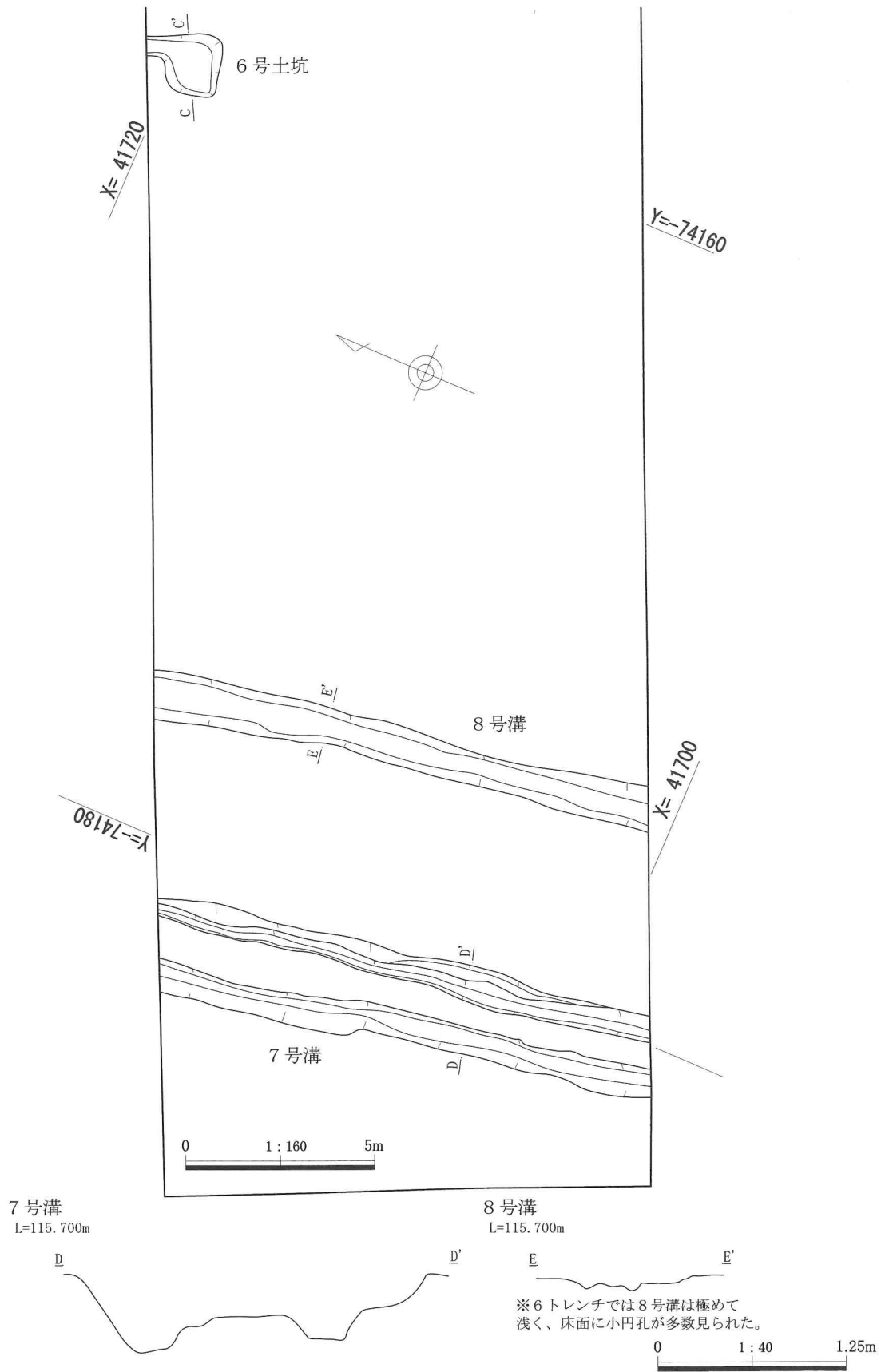


6号土坑

X= 41720



第10図 6 トレンチ平面図(東側) 14～15号溝 6号土坑断面図



第11図 6 トレンチ平面図(西側) 7～8号溝断面図

3 棟高西石田遺跡の調査

7号溝

5トレンチから南に続く7号溝は、6トレンチでは幅の広い溝の両端部分が深い2条の溝のような形状を呈している。

幅は230cm、長さはトレンチ内で13m20cmを計測し、深さは中央の浅い部分で28cm、両端の深い部分では52cmである。

8号溝

7号溝同様5トレンチから南に続いている。幅は104cm、長さはトレンチ内で13m25cm、深さは8cmと浅く、溝底に細かい凹凸が見られる。

14号溝

トレンチ中央東寄りで検出された溝で、掘削された方向は7・8号溝及び後述する15号溝と同じである。

幅は108cm、長さはトレンチ内で13m25cmを計測し、深さは44cmと比較的深い。

覆土は砂粒を極めて多く含む黒褐色土である。

15号溝

14号溝の東に並んで掘削された溝で、幅60cm、長さは南壁から12m20cm北へ伸びた後、直角に折れ曲がり更に10m25cm続いている。

覆土は砂を多く含む黒褐色土で14号溝に近い。

6号土抗

165cm×150cmの隅丸方形の土抗に、幅58cmの溝状の突起が北へ向かって付随している。このまま突起が連続すれば溝となる可能性も考えられるが、今回は土抗として扱った。深さは22cmで、立ち上がりは緩やかである。

7トレンチ（第12・13図）

7トレンチは6トレンチの南にあるトレンチで、東西は67.48m・南北は12.95mである。

浅間B軽石は6トレンチでは完全に削平されていたが、7トレンチでは東端部に残存しており、浅間B軽石下の畦が検出された。（第2図・第12図）

畦から見た水田規模は南北6.1m・東西6.85mのほぼ正方形であるが、北側の水田は東西の方が長いと推定される。

検出された畦より西側は、トレンチが削平を受けており浅間B軽石は検出されない。また、畦以外の水路その他の水田付随施設は検出されなかった。

水田が検出されたトレンチ東端では2間×2間の掘立柱建物（1号掘立柱建物）とこれに隣接する井戸（2号井戸）が検出された。これらの施設は、3トレンチで検出された1号井戸と同様中世の所産であると考えられる。1号掘立柱建物の周囲では1号井戸と異なり風倒木は検出されていない。

また、当トレンチからはほぼ南北方向に掘削された16～19号溝とこれに直交する角度の20号溝が存在し、18・19号溝に接して溝とほぼ同じ方位に主軸を持つ、8・9・11・12号土抗と円形の10号土抗が、若干東に位置がずれるが、ほぼ同じ方位に傾く13・14号土抗が掘削されている。

浅間B軽石下水田

浅間B軽石下水田はトレンチ東端で検出された。畦の数は南北方向が2本・東西方向が2本である。今後南

北方向の畦を南北畦・東西方向の畦を東西畦と呼称する。

南端部で検出された3筆の水田は、南半がトレンチ外であり全体の規模は不明であるが、南北畦の間隔から、水田の東西規模は6.85mであることがわかる。南北畦のうち西側の畦は南側の東西畦の北側に伸びておらず、T字に接している。また東側の南北畦も北側の東西畦とT字に接しており、これより北の状況は不明である。

北側の2筆の水田は、東西方向の規模が明らかではないが南北は6.1mで、東西に長い長方形を呈している。

1号掘立柱建物

トレンチ東端部の水田が残存している地点から検出された、北辺4.2m・東辺3.3m・南辺4.2m・西辺3.35mの、東西方向にやや長い2間×2間の掘立柱建物である。

柱穴間距離は東西が1.95m～2.18m・南北が1.63mあり、柱穴の深さは検出面から30～50cmである。

隣接する菅谷石塚遺跡で検出された掘立柱建物の主軸方位がほぼ東西・南北方向であったのに対し、1号掘立柱建物は僅かに方位をずらしている。

中世の遺構であると推定されるが遺物は検出されなかった。

1号井戸

1号掘立柱建物の東辺に接して南に掘削された井戸である。直径約1mの円形で、中位でやや小さくなり径68cmとなる。深さは78cmを計測し、底面は平坦である。覆土は浅間B軽石を含む黒褐色土である。

1号掘立柱建物に伴う井戸であると推定されるが、遺物は検出されなかった。

16号溝

トレンチ南西端より南北方向に掘られた溝で、2条の溝が南北に連結したような形状を示している。溝北側は南側に比較して幅が細く70cm、南側は広く157cmを計測し、トレンチ内で14.15mある。断面を見ると、北側はほぼ垂直の立ち上がりを見せ、深さは21cm、南側は緩やかな立ち上がりで断面に多くの小凹凸が認められ、深さは26cmである。

検出位置は5・6トレンチの7号溝に近いが、溝の規模等が全く異なることから別の溝として扱っている。東に存在する16・17～19号溝とほぼ掘削方位が一致している。

17号溝

トレンチ中位の南壁から北へ掘削された溝で、幅104cm・長さ774cmを計測する。2基の細長い土抗が、南北方向に連結したような形状を示している。深さは46cmを計測し、底面は平坦で直立した立ち上がりを示す。

隣接する18・19号溝及び8・9・11・12号土抗と同じ主軸方位であるが、溝はトレンチ南北の中位付近で立ち上がり北へ続かない。

18号溝

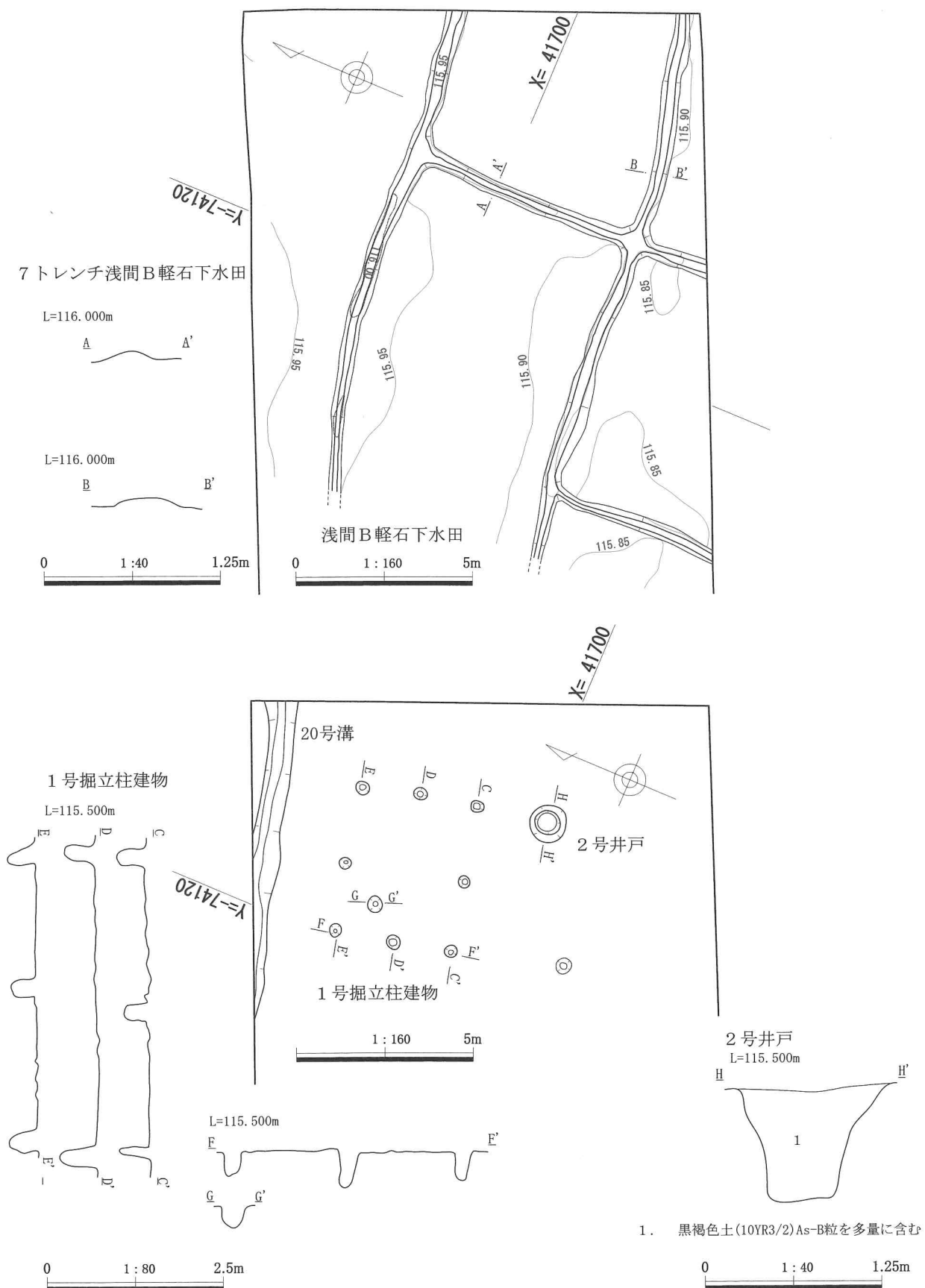
17号溝の東に接して掘られた溝で、東に隣接する19号溝と掘削方位・幅などの規模がほぼ同一である。19号溝とセットで道となる可能性も考えられるが、北の6トレンチからは続きが検出されなかった。

幅40cm・長さはトレンチ内では13m25cmで、深さは検出面から6cmと浅い。床面からは緩やかな立ち上がりを示し、11・12号土抗はほぼ重なるように存在する。

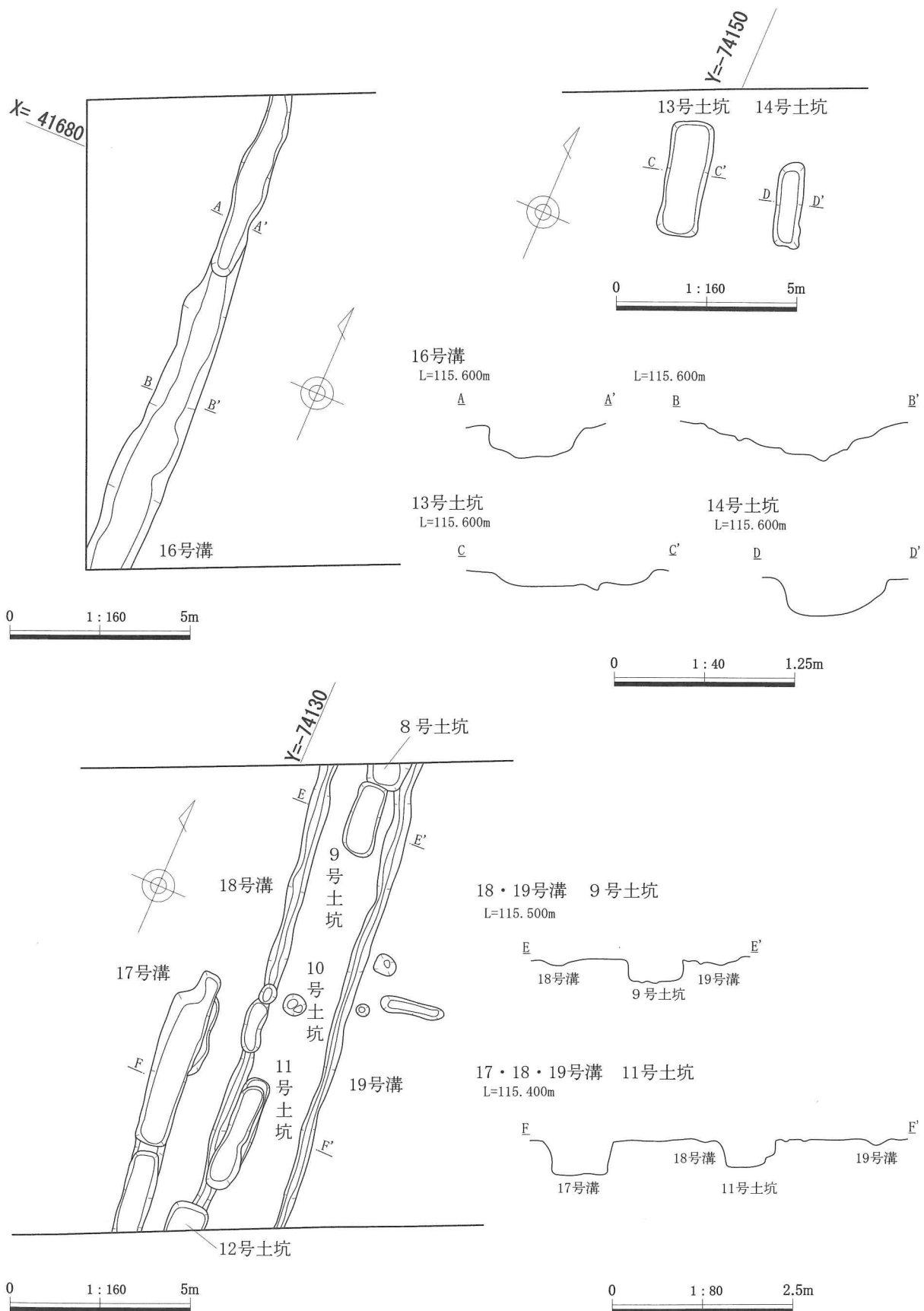
19号溝

18号溝の東2.2mに接して存在する溝で、幅38cm・長さはトレンチ内で13m70cmを計測する。深さは検出面から10cm前後と浅い。

3 棟高西石田遺跡の調査



第12図 7トレンチ平面図(東端部) 浅間B軽石下水田・1号掘立柱建物・2号井戸断面図



第13図 7 トレンチ平面図 16～19号溝・9・11・13・14号土坑断面図

3 棟高西石田遺跡の調査

18号溝とセット関係にあると推定される。

20号溝

調査区北東端に存在する溝で、幅75cm・長さはトレンチ内で7 m50cmを計測する。主軸方位を見ると、西で検出された16～19溝に直行する方向に掘られている。

深さは20cmで緩やかな立ち上がりである。

8号土抗

19号溝に西に接して掘られている土抗で南の9号土抗と連結している。北半はトレンチ外のため不明である。

幅は180cm・長さはトレンチ内では84cmであり、底面は平坦で立ち上がりは直立に近く、深さは33cmを計測する。

9号土抗

8号土抗の南に連続する土抗で、幅は82cm・長さ203cmである。床面は平坦で、立ち上がりはほぼ垂直であり、深さ30cmを計測する。

主軸方位を見ると、隣接する19号溝及び11・12号土抗とほぼ同じで、溝と関連した同一機能を持つ土抗であったと推定される。

10号土抗

トレンチ南北中位で18号溝の東に接して存在する径63cmの円形土抗である。

11号土抗

18号溝の東に接して掘削された土抗で、幅78cm・長さ326cmを計測する。

11号土抗のすぐ南には12号土抗が存在し、それぞれの土抗が8・9号土抗と近い位置関係にある。また、掘削された主軸方位がほぼ18・19号溝に一致することから、溝に伴う施設である可能性も考えられる。また17号溝も主軸方位が同一で尚且つ土抗が連結したような形状を示していることから、同一の遺構であったこともあり得る。

床面は平坦で、立ち上がりはほぼ垂直である。深さは38cmを計測する。

12号土抗

11号土抗の南に接して掘削された土抗で、南半はトレンチ外である。

幅は106cmで、長さはトレンチ内では98cmである。底面は平坦で垂直に立ち上がり深さは35cmを計測する。

11号土抗とセット関係にあったと推定され、隣接する17号溝及び8・9号土抗に近い。

13号土抗

トレンチ中央やや西寄り北端で検出された土抗で隅丸長方形を呈している。東にはほぼ同様の主軸方位を持ち、やや小型の14号土抗が存在する。

幅112cm・長さ323cm南北に長い形状を示し、床面はほぼ平坦である。床からの立ち上がりは垂直気味であるが検出面からの深さは約10cmと浅い。

主軸方位は西で検出された16号溝、東で検出された17～19号溝、8・9・11・12号土抗と比較してやや西に傾いている。

14号土抗

13号土抗の東に接して存在する土抗で、幅72cm・長さ233cmを計測する。主軸方位は13号土抗とほぼ一致しているが、当土抗のほうがやや小型である。

幅72cm・長さ233cmで、床面からの立ち上がりは垂直気味である。深さは検出面から24cmと平面形態が13号土抗と比較して小さい割には深く掘られている。

8 トレンチ（第14・15図）

8 トレンチは7 トレンチの南にあるトレンチで、東西は68.66m・南北は20.82mである。

7 トレンチの東端部のみに残存していた浅間B軽石は、8 トレンチからはほぼ全域から確認され、浅間B軽石下水田が検出された。浅間B軽石はトレンチ東端の中央部分から西に向かって帯状に削平を受けている部分があり、ここから水田は確認されなかった。

7 トレンチで検出された18・19号溝の続きが北壁から南に連続しているのが確認された。溝は3.5m程度続いた後浅間B軽石と共に削平を受けている。また、南の浅間B軽石が検出できる部分においても溝が現れないので、東か西に折れるか存在しなくなるものと考えられる。

他の遺構としてはトレンチ北西隅から東西畦とほぼ同じ角度（ほぼ東西方向）に伸びる23号溝と隅丸方形の15号土抗が存在する。

浅間B軽石下水田

畦から水田規模がわかる水田面は2筆である（第14図）。これらのうち西側の水田面は南北9.4m・東西9.6mあり、東側は南北7.2m・東西10mを計測する。この規模は7 トレンチ・9 トレンチで見られる水田面の規模よりやや大きめである。

トレンチ北側には23号溝が存在し、これより北側の畦は削平を受けており残存していない。23号溝は東西畦の方向にほぼ一致しているが、溝と畦が重複関係にあることから別の遺構であると考えられる。

水路その他の水田付随施設は検出されなかった。

18号溝

トレンチ北壁から南に向かって2.95m伸び、そこから南は削平を受けている。7 トレンチで検出された18号溝の続きである。

19号溝

トレンチ北壁から南に向かって3.5m伸び、そこから南は削平を受けている。7 トレンチで検出された19号溝の続きである。

23号溝

トレンチ北西隅から東へ42m伸びる溝である。西端部では幅42cm・深さ40cmの溝と幅40cm・深さ25cmの2条の溝が並行しているが、西壁から20m付近で合流して1条の溝となっている。1条となってから東の溝幅は74cm・深さは40cmである。

溝の掘削されている方向は水田の東西畦とほぼ一致しているが、覆土にほとんど浅間B軽石が混入しておらず水田に伴う水路とは考えられない。

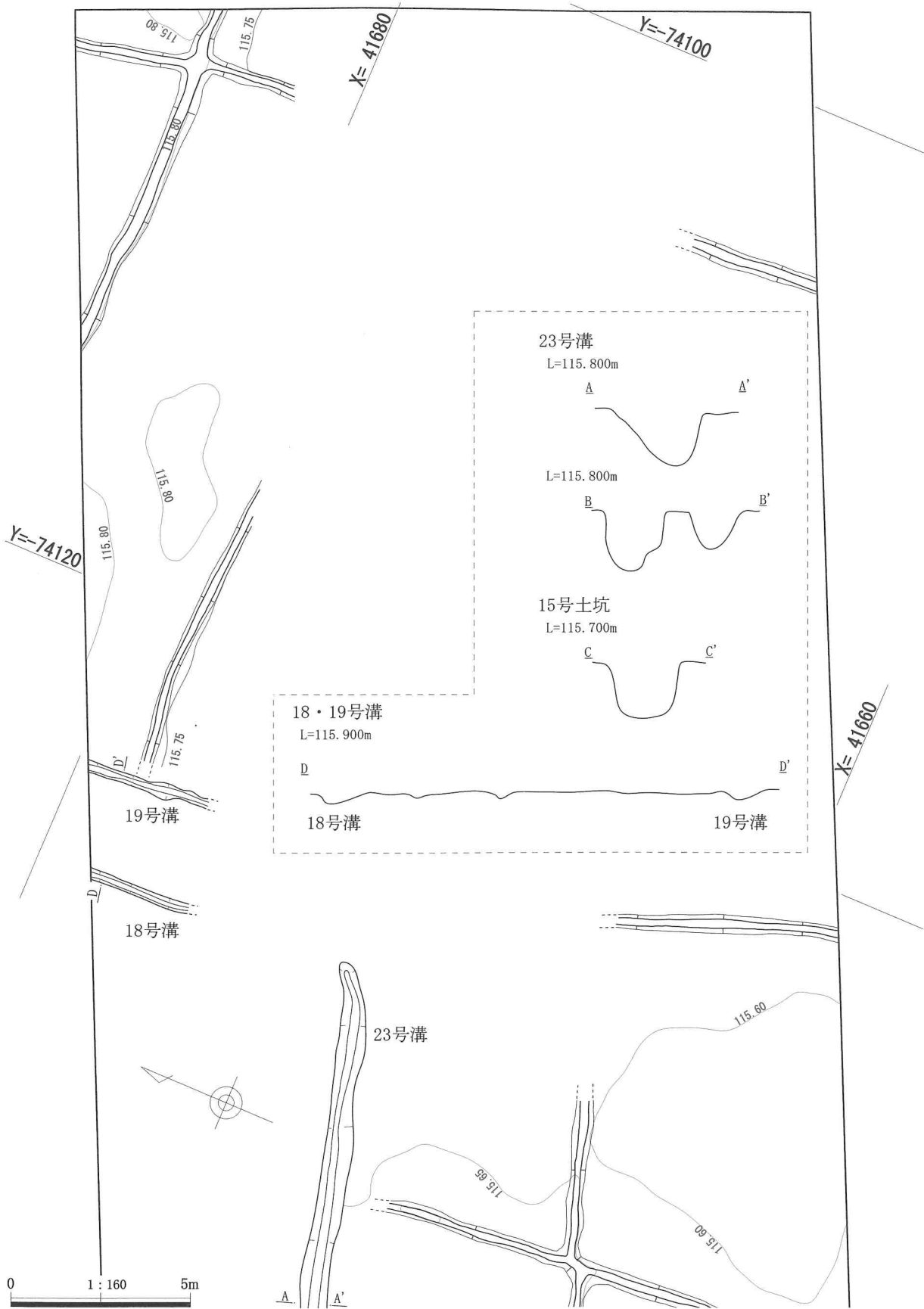
15号土抗

トレンチ西端部に存在する、南北52cm×東西118cmのやや崩れた隅丸方形の土抗で、床の東端は土抗状に掘

3 棟高西石田遺跡の調査

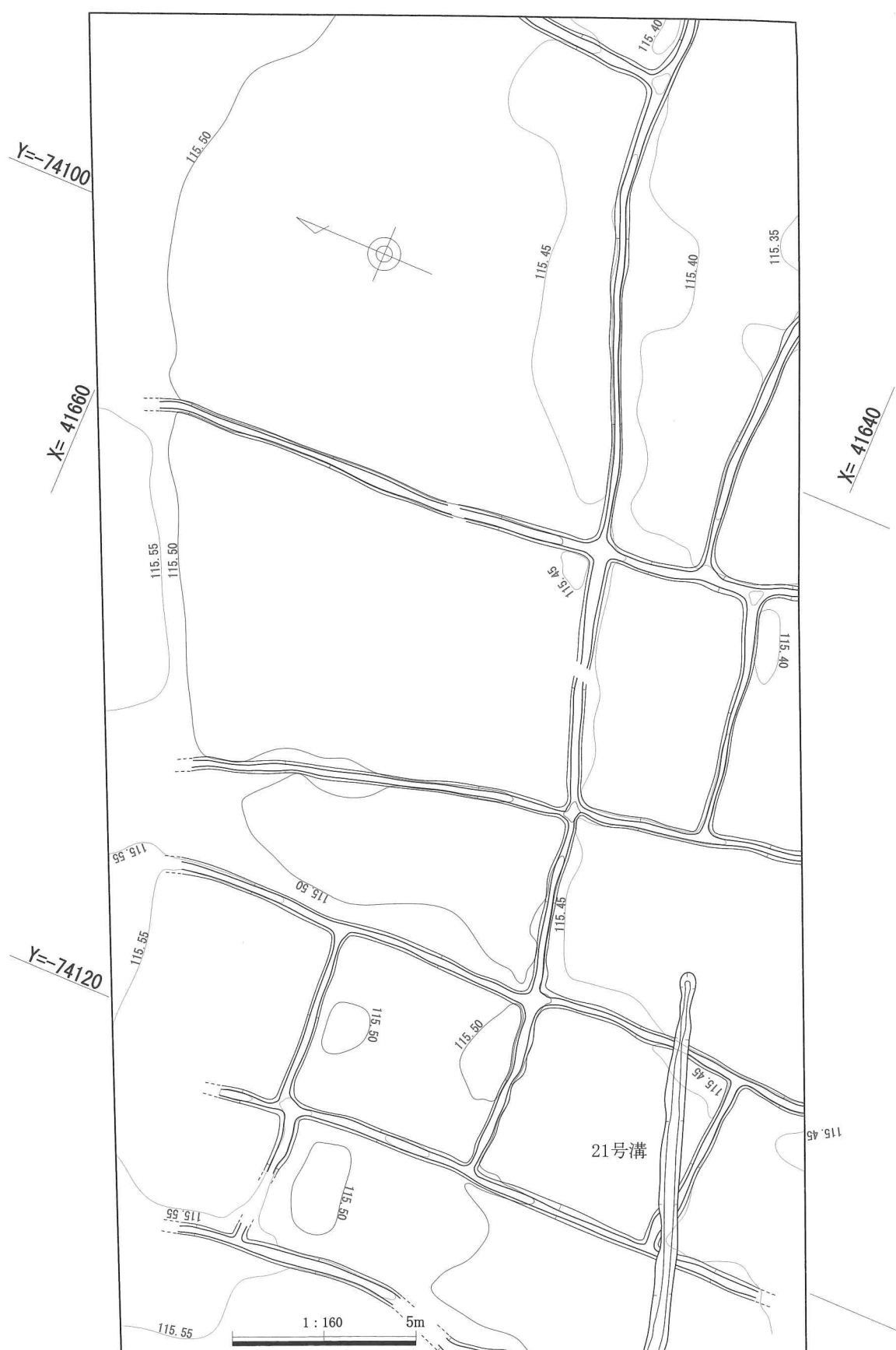


第14図 8 トレンチ平面図(西側)

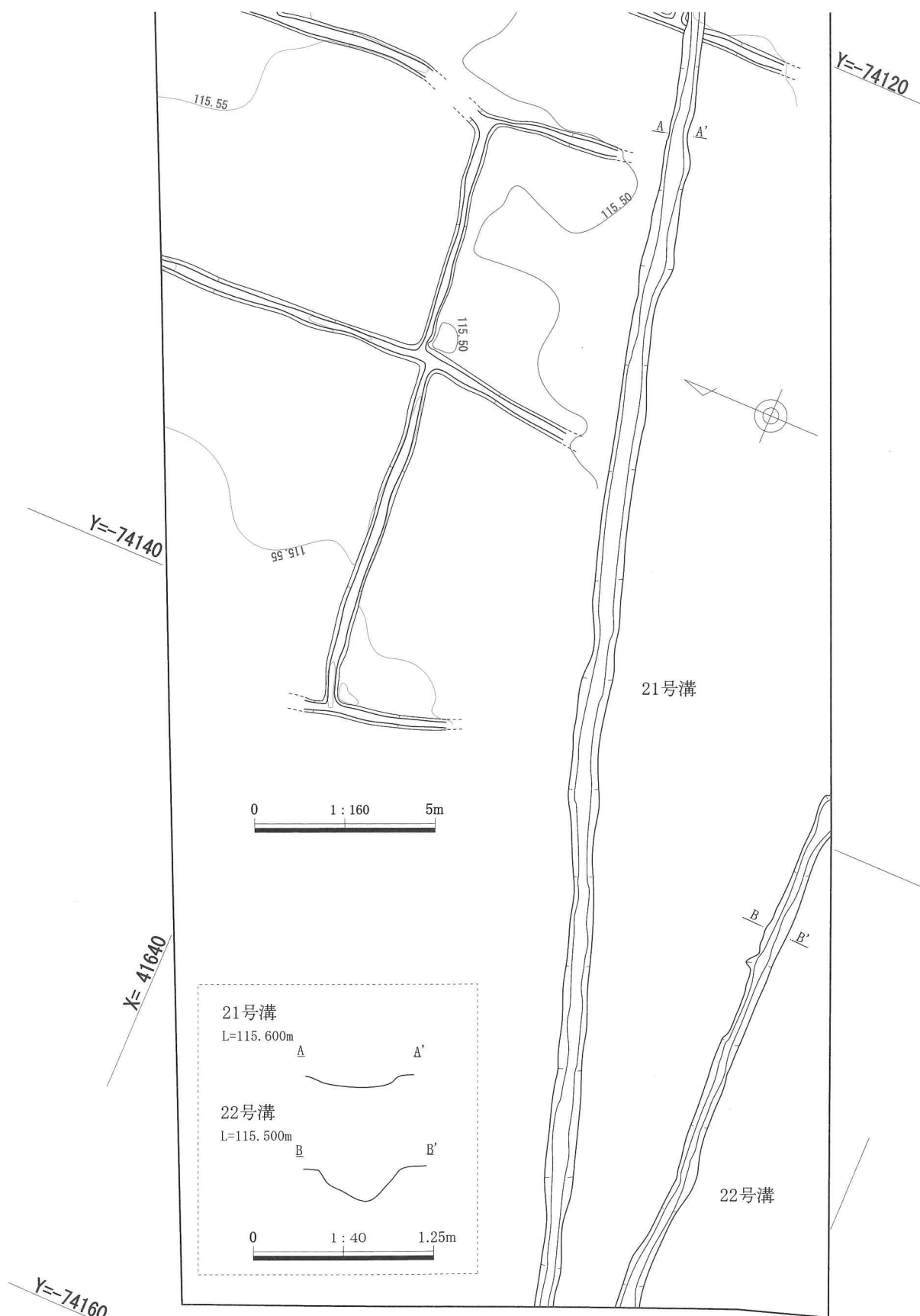


第15図 8 トレンチ平面図(東側)

3 棟高西石田遺跡の調査



第16図 9 トレンチ平面図(東側)



第17図 9 トレンチ平面図(西側)

3 棟高西石田遺跡の調査

りくぼめられている。

底面はほぼ平坦で、立ち上がりは垂直である。深さは検出面より38cmあり、土抗の平面規模に比較して深めである。柱穴のように見られるが、周囲に同様の土抗は確認できなかった。

9 トレンチ (第16・17図)

9 トレンチは8 トレンチの南、遺跡の南東隅にあるトレンチで、東西は69.08m・南北は18.68mである。

トレンチ北東部の一部と南西部を除くほぼ全域から浅間B軽石が確認され、軽石下からは水田が検出された。

トレンチ南西部には、21・22号溝が存在している。22号溝はトレンチの南壁からトレンチ外へ貫けているので詳細は明らかではないが、21号溝は西壁から43m付近で立ち上がり、そこから東へは続かない。この21号溝の構造は8 トレンチで見られた23号溝とよく似ており、同一の機能を持った溝である可能性が推定される。

浅間B軽石下水田

トレンチ中央部分を南北に並ぶ正方形の水田面が4筆存在し、これから東は畦の角度をやや変えて、東西の長さが広い水田面が並んでいる。コンタラインを見ると西側ではやや崩れているが、東側ではラインに沿って畦があることから、微地形に合わせて畦の角度を変えたことが推定される。

トレンチ中央の水田面の大きさは東西4.6m・南北5.2mであり、これより東で水田規模が確認できるやや小型の1筆は、東西6.6m・南北3.0mを計測する。これより東の畦を見ると、更に東西が長くなっているが、残存状態が良好ではなかったため畦が検出できなかった可能性も否定できない。

また21号溝の方位と畦の方位がほぼ一致しているが、溝によって畦が掘削されていることから、水田に伴う施設ではなく、これより新しいものであることがわかる。

21号溝

トレンチ南で西壁から東に向かって43.1m伸びる溝である。東端で立ち上がった後は溝の続きは連続していない。幅は55cmで深さは8cm前後と浅い。

22号溝

21号溝の南に並行する溝で、掘削された方位は21号溝よりやや南寄りである。トレンチ内で14.7m確認され、南壁からトレンチ外に貫けている。幅は55cmで21号溝とほぼ同一であるが、深さは25cmありこちらの方が深い。

3-2 調査のまとめ

当遺跡は調査区東側を中心に浅間B軽石の堆積が認められ、軽石下から水田の畦が検出された。畦の方向を見ると、微地形に従って多少の変動は認められるが、ほぼ東西南北方向に造られている。水田に伴う水路などは検出できなかった。また隣接する菅谷石塚遺跡等で検出された浅間C軽石下水田・榛名二ツ岳噴出火山灰(Hr-FA)下水田は、当遺跡では検出できなかった。

調査区西側の1～4 トレンチでは地層上面が削平を受けており、浅間B軽石が確認できなかったが、特に2・3 トレンチに集中して大型の風倒木が存在したこと、風倒木の断面から見た旧地表が現在よりも1m近く高かったことなどから、天王川沿いでは現在とは異なり大型の木が密集する微高地となっていたことがわかった。従って、水田が検出できないのは削平のためではなく、当初から存在しなかった可能性も考慮する必要がある。

発掘調査報告書抄録

ふ り が な	むなたかにしいしだ
書 名	棟高西石田遺跡
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	高崎市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第210集
編 集 者	黒田 晃
編 集 機 関	高崎市教育委員会
所 在 地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
発 行 年 月 日	2007年 3 月31日

所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むなたかにしいしだ 棟高西石田	ぐんまけんたかさきしむなたかまち 群馬県高崎市棟高町	10202	393	36°22'10"	139°10'00"	2006.06.12 } 2006.11.30	1,485m ²	小学校建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 跡	主 な 遺 物	特 記 事 項
棟高西石田	生産 館址	平安 中世	水田 1 面 掘立柱建物 1 棟 井戸 2 基 風倒木	土師器小片	平安時代後期の浅間B軽石で 埋没した水田を検出。 中世のものと推定される掘立 柱建物と井戸を検出。



1 トレンチ 東から



1号溝・2号溝 南東から



1 トレンチ調査風景



2 トレンチ西側耕作痕 南東から



2 トレンチ東側 西から



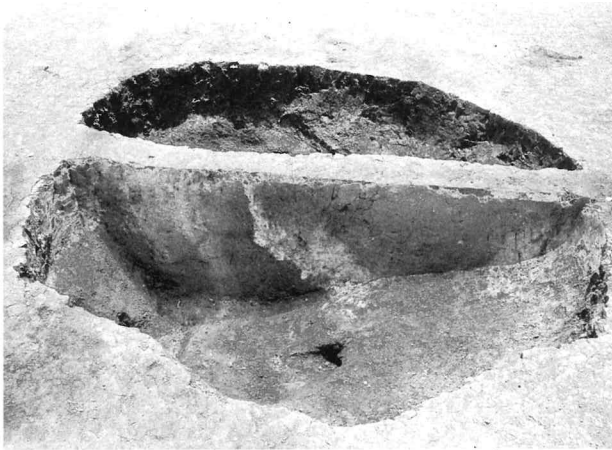
2 トレンチ東側小穴群 南西から



1号風倒木断面 北から



1号風倒木 北から



2号風倒木断面 北から



2号風倒木 北から



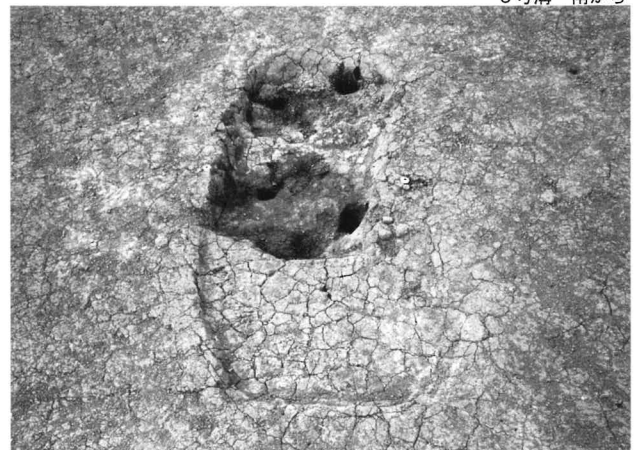
3・4号溝 北から



5号溝 南から



1号土坑 東から



2号土坑 南から



2トレンチ測量風景



3トレンチ 東から



3号風倒木調査風景 東から



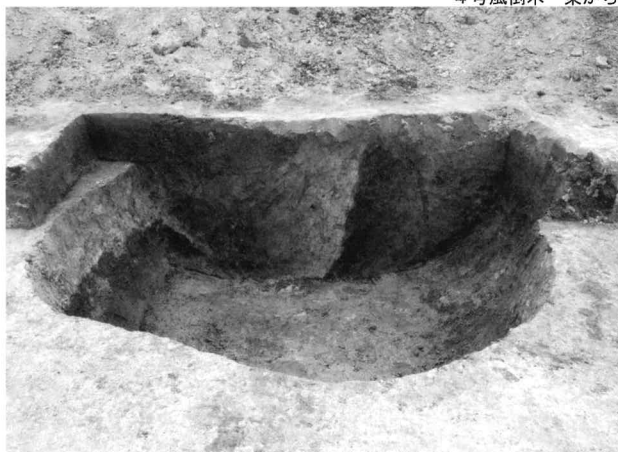
3号風倒木 東から



4号風倒木 東から



4号風倒木 東から



5号風倒木 南から



6号風倒木 南から



1号井戸 2段構造の掘り方



1号井戸 東から



4号トレンチ 西から



6号溝 南から



5号トレンチ 浅間浅間B軽石除去作業



5号トレンチ浅間B軽石下水田



11号溝から西の溝群 南東から



7号溝 南から



9号溝 南から



11・12号溝 南から



8・12号溝 南西から



14・15号溝 南から



6号土坑 南から



7トレンチ浅間B軽石下水田 南東から



1号掘立柱建物・2号井戸 北西から



2号井戸 北から



8トレンチ浅間B軽石下水田 北から



8トレンチ浅間B軽石下水田 北西から



9 トレンチ浅間B軽石下水田検出状況 北東から



9 トレンチ浅間B軽石下水田 西から



9 トレンチ浅間B軽石下水田 西から



9 トレンチ浅間B軽石下水田 南から



9 トレンチ浅間B軽石下水田 南西から

高崎市文化財調査報告書第210集

棟高西石田遺跡

2007年 3 月31日 印 刷

2007年 3 月31日 発 行

編 集 高崎市教育委員会

発 行 高崎市教育委員会

印 刷 上武印刷株式会社
